
魔法使いと大きな船

中西矢塚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法使いと大きな船

【Nコード】

N1717V

【作者名】

中西矢塚

【あらすじ】

『正体不明』の『何者』かに誑かされて転生して戻ってきてみれば、世の中の裏には魔法なんてものが幅を利かせる世界があったことに気づいてしまった。そんな話。

コンセプトは『俺の・俺による・俺のためのラノベ』。

少年が学校で美少女と戯れながら世界の裏側でバトルに巻き込まれたり、メカに乗り込んでみたり。

つまり、そんな話。

一話（前書き）

塩漬けにしたまま長く放置しておくのも自分の精神衛生上よろしくないなので、一応ファーストチャプターだけは完成したことを区切りとして、公開を開始します。

オリジナルは初めてとなるので、正直どこまで進めるかイマイチ自分でも解りませんが、出来るところまで可能な限り頑張って見ようかと思しますので、どうぞよろしくお願いします。

一話

足元には白い砂浜。

天井を見上げれば、まったく果ての見えない漆黒の闇。

身体に纏わりつく重たい感触は、決して大気などでは作りえない重みを有した物だ。

重く、硬く、柔らかく、暖かくて冷たい。

鼻腔をくすぐる潮の香りで、それが海水だと言う事に気づく。

海水。一面の海水。つまりは海の中。

しかし海の中だというのに足元に地面が存在している。ならばここは、海の底なのだろうか。

海の底に広がる砂浜。

白い砂粒の広場。

それはきつと、時折視界の中でチラチラと光る、白い切片が降り積もって出来上がったものに違いない。

マリンスノー。

確かそういう名前だった気がする。

海中の微生物の死骸が積み重なった物——そんな風に書くと、ロマンの欠片も無いけれど。

けれど、足元に広がる砂浜が、天井より舞い降りる白い粒子が、其処を照らすように沸く発光している光景は、圧倒的に美しく、とてもとても幻想的なものに思えた。

この世の物ではありえない。

この世にあっては目視する事は叶わない、そういう類の物に思えて。

ああ、つまり。

即ち、それを目視している僕は、最早この世では無い場所へとたどり着いてしまったということだ。

へとっくの昔に気づいていると思うけど――

頼りなく、おぼろげな自分自身の存在感。

足元の砂浜の感触を確かに感じるのに、けれど、そこに脚があるのかすら解らない。

手は、目は、鼻は、口は。五感の危うさは、寒気すら覚える程だ。だからつまり。

〈キミは、死んだ〉

その言葉が、真実なのだろう。

◆◇◆魔法使いと大きな船◆◇◆

水没する街の夢を見た。

目を見開く。

息を呑む――呼吸が出来ることに、安堵を覚えて郁斗は身を起こした。

カーテン越しに柔らかな光が、広い寝室に差し込んでいる。柔らかなクッションの効いたベッドから這い出して、カーテンを

開く。

朝の太陽の日差しが、眩く郁斗の頬を照らす。

観音開きの窓を開ければ、髪をなでるのは桜の香りの混じる春の風。

窓辺から眺め渡せる景色は、桜色に包まれた山並みと、どれだけ時代を経ても人が営みを繰り返り広げる限り無くなる事は無いであろう牧歌的な田園風景。そして更にその向こうに、近代的な都市が広がっているのが解る。

澤乃さわのぎ城市。

四方を山に囲まれた、その周囲から孤立してしまった―――そのくせ、現代の地方都市の基準に見合うまでには発展している、一風変わった地方都市である。

郁斗はその地形全てが見下ろせる、山間の古い洋館の一室に居た。この澤乃城の地で歴史と伝統を積み上げてきた有澤ありさわと言う一族の住まう洋館。

その客間の一室が、今の郁斗の住居だ。

「着替えるか」

窓の向こうの景色から視線をはずして、郁斗は踵を返す。

名士と呼ばれるに相応しい人々が住まう洋館は、一部屋一部屋がこれでもかと思えるくらい広く、ゆったりとしたスペースを有している。

郁斗が間借りしているこの客間だってそう。

内部は居間と寝室が内扉を隔てて独立しており、おまけに専用の洗面所と、風呂と便所すら。

どこの旅館のスイートルームなのやと、小学校を卒業した三月の終わりから、中学校の入学式を当日に迎えた四月の頭の今日の日

まで、常に考えずには居られなかった。

なんというか、居るだけでくたびれるのだ、この部屋、いや、屋敷そのものが。

郁斗は部屋を間借りしているだけの居候で、本来ならば住宅ローンに頭を悩ませる中流階級の両親の間に生まれた小庶民の一人息子に過ぎなかったから、こういう所謂セレブリティな環境はどうしても馴染みがたかった。

「中学、高校……最低でも六年か。大学も含めたら……いや、バイト出来るようになったら部屋でも借りるか？　——それも最速で三年後の話だしなあ」

「……何か、当家にご不満でも？」

「いえ、別にそんなことは。ただ単純に、僕にはこの生活は贅沢すぎて身に余るなって話で……って、うわ。天瀬さん、居たんですか？」

着替え中の独り言に合いの手が入ったことに驚いて、振り返る。

「居ますが、何か問題でも？」

はたしてそこには、いかにもこの古めかしい洋館に相応しかろう格好をした女性の姿が合った。

上下青の装いの上に、フリルのあしらった白いエプロン。そして頭にはヘッドドレスを被っている。

使用人、女中——或いはシンプルに、メイドなどと呼ばれる職種の間人。
種の間人。

名を、天瀬由宇。
あまがせ

成人前の少女のはずだったが、代々お屋敷づとめの家系の生まれであるらしく、楚々とした態度は実に様になっていた。

「ええと……むしろわざわざいらして頂いて、何か問題でも？」

「食堂まで迷わないか心配なので迎えにいけど、奥様が」

「いや、流石に家の中で迷子になるほど子供のつもりも無いんですけど」

「ネクタイをちゃんと締められない方が言っても、説得力はありま

せんよ」

今日から通学する予定の中学校の制服はワイシャツ、ネクタイ、ジャケットのシンプルなブレザータイプのもので、郁斗にはこれまでネクタイを締めると言う習慣がほとんど無かったのである。

楚々とした態度に、そこだけ少しの茶目っ気がこめられていた。郁斗の襟元に手をやり、丁寧な仕草で雑に巻かれたネクタイを締めなおしてくれる。

「……お手数、おかけします」

「手間賃は頂いていますので」

かまいませんよ、とジャケットの襟位置を整えながら、由宇は満足そうにその出来栄に頷く。

「これで、何時もどおりの格好良い郁斗君ですね」

「格好良いかどうかは知りませんが、いや、助かりました。おかげで学校で恥をかかずに済みそうです」

「それは何より。では、私の後にどうぞ」

由宇は郁斗の言葉に使用人と年上の女性の間の態度で返しながら、廊下へと続く扉を開いて郁斗を誘う。

廊下へと一步を踏み出す。

長い廊下は、大きな窓がはめ込まれており、中庭の芝生の広場が一望できた。

由宇の後に続きながら、郁斗は何気なく窓の向こうへと視線を送る。

ふと、窓に反射した自身の顔が、見えた。

幼い、所詮は十二歳の少年の顔。まだまだ男と呼ぶのは程遠い、純日本人特有の童顔。

春の日の光を弾き、その髪が、銀色の光を放っていた。思わず足を止めそうになってしまい、しかし何時ものことだと、

郁斗は首を横に振って歩を進める。

何時ものこと、何時ものこと、当然のこと。

——ざあああん。

「郁斗君？」

背後の足音が途絶えたことに疑問を覚えたのだろう。振り返った由宇が尋ねる。

しかし郁斗は直ぐにはそれに応ぜられなかった。自分の耳の傍に手を置いて、立ち尽くしている。

「……郁斗君？」

二度目の呼び声。

「——いえ、すいません。ちょっと耳にゴミでも入ったみたいで」「そうですか。——学校が終わりましたら、耳掃除でもしましょうか？」

「勘弁してください……」

由宇の冗談に乗っかる形で、郁斗は再び廊下を歩み始めた。最初の一步のときに、少しだけ背後を振り返って。

日差しの差し込む長い廊下。

他に何も、あるはずが無い。

この山奥の洋館に波の音だなんて、あるわけが無い。



一年郁斗ひんとせという少年が居る。

人は彼を指差して、揃えて、こんな風に評するだろう。

賞賛と憧憬、期待と恐れ、そして幾ばくかの、嫉妬もこめて。

つまりは、天才と。

「あら郁斗君、おはよう」

上座に座るのは黒に染まった和服——喪服姿の女性だ。

穏やかな顔で微笑みながら、食堂に入ってきた郁斗の存在に気づいて声をかけてくれた。

有澤ミイナという、この屋敷の家長を勤める人物である。

因みに彼女は、郁斗が知る限り出会った当初から常に、いつ何時でも昼夜問わず喪服を纏っていた。それ以外の格好を郁斗は見たことが無い。

着ているものが着ているものだったので、迂闊にその理由を聞けるはずも無く——大体、彼女が喪服を着ていることで郁斗が困ることは一つも無いので、いつの間にか特に気にならなくなっていた。「おはようございます、奥様、お嬢様」

ミイナはこの有澤の屋敷の家主であり、ついでに両親が海外赴任中の郁斗にとって、現在は後見人的な立場についていてくれる人だから、挨拶の言葉は必然的に丁寧なものとなった。

しっかりと頭を下げながら——ただし、呼びかけるの相手はもう一人居たが。

ミイナの斜め横の席に腰掛けた、ブレザーの学生服姿の少女にも、朝の挨拶は欠かせなかった。

「おはよう、郁斗」

長い黒髪を両サイドの高い位置で纏めた整った顔立ちの少女は、その澄ました表情を崩すことなく、淡々とした調子で郁斗に言葉を返してくる。

ただの朝の挨拶に過ぎないはずなのに、その口調に何処か不機嫌そうなものが伺えるのは、果たして郁斗の気のせいなのだろうか。

「もう、ミラノちゃん。朝の挨拶は笑顔でしなきゃ駄目よ」

「一日の始まりの言葉なのです。しっかりと礼節をわきまえた態度を心がけねばなりません」

苦笑気味の母親も、ミラノはツンと澄ました態度で退ける。

「もお。……ごめんね郁斗君。ミラノちゃん、まだ納得してくれなくて」

「ちよっと、お母様！」

茶化すような母の言葉に、ミラノは眉根を寄せる。

郁斗として頬を引きつらせながら無難な言葉を返すより無かった。

「ああ、いえ……過大な評価を頂いちゃっているかなとは、僕自身も思ってますし」

だからそれ以上、ミラノを不機嫌にする発言はやめようと言う言外の提案は、どうやらミイナには受け入れられなかったようだ。

「そういう難しい言葉が平然と口に出来ちゃう子に対しては、ちっとも過大な評価じゃ無いわよ。ねえ、由宇ちゃんもそう思うでしょ？」

「そうですね。郁斗君のしゃべり口調は些か年恰好から外れているように思えます」

「年上っぽい魅力が出るから、きっと学園ではいっぱい女の子に頼られて人気者になれるわよ」

朝食を載せたキャスターを引いてくる由宇まで巻き込んで、楽しそうに言う。

「——郁斗」

「……はい、お嬢様」

楽しそうな母親とは対照的に、娘の口調は氷点下と言った有様で、郁斗は神妙な態度で頷く他無い。

対面に座った美少女、今はその顔は、不機嫌そのものを表していた。元が美人だからこそ、恐ろしい迫力。

「学園は、女漁りをするための場所ではありません。学問、知識を身につけるための学び舎であることを心がけなさい。常に。——ええ、常に。決して女などにうつつを抜かして勉学を疎かにしないように。私の言っていることが貴方になら解りますね？」

「……はい」

頷く以外にどうしろと言うんだという気分で、郁斗は頷く。

年に見合わぬ若々しい態度で頬を膨らませていた喪服の女性は視界に入れないようにするしかなかった。

勤めて真面目を意識した郁斗の態度にミラノは漸く満足したのか、よろしい、と一つ頷く。

「如何なる理由なれど、貴方は幸運にも澤乃城学園さわのぎの門を潜る資格を有したのです。この機会を逃さず、良く学び、よき経験を積むのですよ。真面目に、一心に……遊んでいる暇など、ええ、あるものですかっ！」

言葉尻に行くに従い、妙な力がこもっている気がするのは、恐らく郁斗の気のせいではないだろう。

この屋敷に住むようになってから早二週間と少し。

朝に夕に、顔をあわせるたびにミラノは郁斗にくどい様に同じような内容の話を繰り返していた。

勉強をしろ。勉強を。遊んでないで——いやむしろ、遊ぶな、的な話を。

「もお、ミラノちゃんたら。ウチは自由な校風が売りなんだから、あんまり硬いことばかり言っちゃ駄目よお」

「自由ではありません。澤乃城の校風は自主自立がモットーなのです。理事長がそんなことでどうするのですか！」

澤乃城学園さわのぎとは、この洋館の麓に広がる城乃下市きのしたに存在する私立学校のことである。

小中高大一貫教育の、近隣の上流階級の子弟が多く通う、由緒正しい学園だ。

設備、人材共に超一流のそれを揃えて、政治経済に始まり芸術、学術、或いは医療分野まで、この国の発展を支える優秀な人材を育成するための最高の教育を施すべく設立された学び舎である。

当然の話だが、設備が一流なら掛かる費用もまた——という話で、つまり早い話、そんな学校に有り触れた中流家庭の長男程度の少年が通うことが出来るなど、常識で言っておりえないのだが。

一年郁斗^{ひんとせ}という少年が居る。

人は彼を指差して、揃えて、こんな風に評するだろう。
賞賛と憧憬、期待と恐れ、そして幾ばくかの、嫉妬もこめて。

つまりは、天才^{てんさい}と。

「郁斗君みたいな優秀な生徒さんが入学してくれるなんて、理事長としては嬉しい限りだけどお……郁斗君の場合、優秀すぎて授業が退屈かもしれないわねえ。でも安心して、ウチの学園おっきな図書館とか私には何がなんだかさっぱり解らないお金ばかり掛かる実験設備とか、そういう郁斗君が好きそうな遊び場が沢山あるから。授業飽きちゃっても、つまらなかつたりしたら、サボっちゃってそこで好きなだけ遊んでれば良いわ」

『ね?』などと、年齢を感じさせないたおやかな手つきで頬に手を当てながら、ミイナがまるで空気を読まずに微笑む。

よりにもよって学校経営者が生徒に向かって授業のサボタージユを推奨するとか、そりゃあミ^{むすめ}ラの頬がピクリと引きつったりするのも当然だろう。

「……郁斗」

「はい……お嬢様」

僕が何かしたわけでもないんだけどな、と内心で思いつつも、郁斗は一応神妙な顔でうなずいた。

それなりに付き合ひのある少女だったので、こういうときは怖いと良く理解していたのだ。

二人の関係は、空気を讀まないことに定評のある郁斗の父が、無謀にも勝手に勤めていた会社の社運を掛けて、十数年前当時全く付き合ひの無かった有澤家へと営業を仕掛け——そして、それを成功させた事から始まる。

その後、一年家^{ひととせ}は有澤家と仕事以外でも縁が芽生え、その家の子供たちも互いに見知った関係となるに至った。

そして郁斗は父親と違い空気を読みすぎてしまう性質だったから、自分より年上で、家格的な意味でも明らかに目上の存在だったミラノを『お嬢様』などと呼ぶようになる。

ミラノは流石名家の御息女と言うに相応しい高貴さを幼いころから有していたから、へりくだったようにも聞こえる呼び方も、実に似合っていたのだ。

その後、郁斗が十二歳、そしてミラノが十六歳となった今でも、互いの呼び方、転じてその関係は全く変わることがない。

郁斗にとって、ミラノは目上の存在だった。

「当家が招いた優秀な生徒に相応しい振る舞いを、くれぐれも……くれぐれも心がけたいものです。決して、授業をサボったりすることなど、無きよう……私の言っていることが、貴方なら解りますね？」

「最大限、可能な限り全力で善処する所存です」

「もおミラノちゃん。ウチがお願いして来てもらってる立場なんだから、そんな言い方良くないわ」

「我が家が招いたからこそ、なのです。そんな人材が録に勉強もせず女遊びに惚けるようなことがあっては、有澤の家名が問われます！」

「ええ？ 折角中学校に通うんだから、たくさん友達と遊んで、あ、素敵なカノジョとかもいっぱい欲しいわよねえ？」

「いや、ねえ、って言われてもですね……」

「なぜそこで、直ぐにいいえと答えないのですか！」

ミイナの言葉に答えに詰まっていた郁斗を、ミラノは怒鳴りつけるように言う。

「解っているのですか郁斗！ 貴方はその勉学の才を買われて特待生として澤乃城学園へと入学を許されたのです！ 勉学を認められ

て、です！ その辺りをよく弁えなさい！」

「了解であります！」

郁斗は天才だった。

誰も教えた記憶のない外国語を苦も無く理解し、難解な最新の学術論文を読み解くような、郁斗は幼いころからそんな子供だったのだ。

物事の真理、世情を正しく読み解く理解力。

時代の最先端を行く工学知識の、更に十年は先へ届きそうな発想力。

天才と称する以外に、他に方法がない少年だったのだ。

郁斗本人としては、ズルをしているようで笑えない話だったのだが——きっとそれは、誰に言っても理解されないような話で。

だから郁斗は、誰もがそうと理解する天才として、あるべき場所へあるより他、無かった。

二話



「生命が死を迎える時、その魂は肉体を離れてこのシオの海へと環かえる」

マリンスノーが作り出す幻想的な砂浜で、僕はその声を聞いていた。

何処からともなく、否、確実に目の前の漆黒から聞こえる、その声を。

「シオの海とは即ち、無垢なる命そのものだ。命と言うものを作り出す純粋な力の流れと言い換えてもいい。肉体なる器を失った魂は、個を失い力の流れと一体化する。そうして、新たな再生の時を待つんだ」

新たな器に、他と集合し混ざり合った新たな無垢の命となって。つまりこの場所は、『前』と『後』を繋ぐ中継地点といったところか。

俗な言い方をすれば、それこそ。

「そう、死後の世界と言い換えても構わない」

言葉は楽しい響きを伴っていた。僕の考えが、可笑しかったのかもしれない。

「キミは、随分と理解が早い。ひょっとしたら、此処と言う場所に

存在するキミという存在がどういう意味を持つのか、とつくの昔に理解できているのかもしれないね」

此処と言う場所。

それは、全ての命が一つに環かえる場所だ。

僕と言う存在。

なのに、僕と言う固体は確かに存在する。

僕は流れの中で一つに混ざらずに、個と言う存在を保ち続けていた。

自分と言う存在を思い出せる。

これまでの確かな記憶がある。

どういふ人生を歩んできて——そして、そう。
……どうやって死んだのか。ちゃんと、覚えている。

ふとした思い付きで、視線を上へとやった。

光すら届かぬ、一面の海。

生命——生命へとなる、流れ。

仮に、仮にだ。

僕と言う個体を維持したままその流れに乗って、新しい器とやらにたどり着く事が出来たのなら——。

「キミは本当に、理解が早くて助かる」

そうして、僕の思い付きを肯定するように。

「生まれ変わりたいかい？」

声は、僕へと選択肢を投げつけた。

〈今の自分を保ったまま、新たな生を送りたいかい？〉

その後、何か大切な約束をした気がするのだけど。

——ざあん。ざあああん。

波の音が、何もかもをかき消していった。

◇

巨大な塔から枝のように張り出した無数の空中栈橋に係留された、数多の船。

船体の周囲を取り巻く巨大なリングが、幻想的な音を響かせながらゆっくりと回転を続けていた。

——無論、幻覚の類に過ぎない。

「郁斗？」

「郁斗君？」

呼びかける二人の年上の少女の声に、郁斗は我に返る。

一瞬ぼうつとしていた意識を取り直して、一体何を惑っていたのかと自分に苦笑したくなった。

「少し、圧倒されていたみたいです」

無難な言葉を口にして、誤魔化しているようで、同時にそれが真実でもあった。

送迎用の黒塗りの車を降りて、見上げてみれば視界の遠くに巨大な円筒形のビルディングの存在が目立つ。

地上二十五階、地下五階建ての、澤乃城学園敷地内最大の高さを誇る中央校舎の威容だった。

因みに、郁斗たちの現在地は学園正門を抜けた先にあるロータリーである。

目の前から緩やかに傾斜が掛かった大通りの先に、中央校舎。左右に視線を振って見れば、その中央校舎と渡り廊下で結ばれた近代的な、やはり高層の建造物。

「向かって右奥の塔が貴方が通うことになる中等部の校舎です。私たちが高等部生徒が通うのはその前にある塔。左半分に見える建物はすべて、大学の施設ですね」

「因みに初等部の校舎は、中央塔の裏側にありますよ」

「スケール感が狂いそうですね……何ていうか、デカい、広い、遠い……」

それ以外に表現の仕様が無い、澤乃城学園は馬鹿でかい規模の敷地と施設を有する学園だった。

「広さに反して、生徒数は少ないほうだと思えますけどね。ゆったりとした空間で、学園生活を満喫……いえ、勉強にまい進できると思いますよ？」

由宇は主の手前もあってか、発言を慌てて訂正した。

因みに学園のブレザー姿である。胸元のリボンタイの色から解るとおり、ミラノと同年生だ。

彼女は有澤家に仕える者達の子弟に施される教育の一環として、主と共に澤乃城学園に通うことが許されていたのだ。

因みに有澤家の使用人たちの子弟の中で学園に通っているものも他にも数名が居たが、それらは初等部の学生か大学生と、年齢が少し離れていたため郁斗達と登校を一緒にすることは無かった。

「因みに、学生寮は駅前のほうに固まっています」

「固まってって、一つじゃないって辺りが流石っていうか……」

そっちに住みたかったかなあ、とか少し思ってしまう郁斗だった。「顔も知らない両家の子女に囲まれて、返って息が詰まると思いま

すよ？」

「う」

そういえばそういう学校だった。だからこそ、無駄に広々とした施設郡なのだろう。

「何をコソコソ話しているのですか。校舎へ向かいますよ。学生会の人間として、始業式初日から遅刻などと言う無様は晒せません」

「あ、でも僕、お嬢様たちとは学年が……」

「貴方は中等部からの新入生でしょう？ 中央校舎の学生課までは案内しますから、諸手続きは自分で済ませなさい。一人で出来ませんね？」

「えっと、多分」

「そこは『はい』か『いいえ』で答えられるようになりなさい。出来ると判断できたならしつかり出来るというべきですし、自信が無ければ無理だと言わねば余計な手間が掛かります」

「平気です、大丈夫です問題ありません」

往來の真ん中で通学中の生徒たちの視線を集めながら説教と言う自体は避けたかったので、気を付けをして即答しておいた。

ミラノは郁斗の態度に不機嫌そうに鼻を鳴らした後、颯爽とした足取りで校舎へ向かって歩みを進める。

黙って後ろについて来いと言わんばかりの態度。

隣で歩調をあわせてくれる由宇の苦笑気味の顔が、ちょっとした癒しに感じられた。

「お嬢様、多分『いいえ』って言って欲しかったと思いますよ？」

「怒られるじゃないですか、きつと」

というかつまり、怒りたかったという事なのだろうか。

前を歩むミラノの長い黒髪の二房のゆれを眺めながら、そんな風に考えてしまう。

「何かお嬢様、僕が学園に通うことというか……それ以前に城乃下きのしたに居る事自体を嫌がってる感じがするんですけど」

「そんなこと……」

無いとは、由宇は断言してくれなかった。
つまりは、郁斗の言葉に正解の部分が含まれているということだろう。

郁斗は城乃下きのしたではない他県の街で生まれ育った。

当然通っていた小学校も、その近所にあつたものだ。

有澤の屋敷に居候をはじめめるまでは、年に数度、親に連れられて有澤の屋敷に遊びに行くときくらいしか、城乃下きのしたを訪れることは無かった。

両親の海外支社への転勤に合わせて、進学先もそちらの学校へと決めかけていた郁斗を城乃下きのしたに招いたのは有澤家の頭首ミイナその人である。

彼女は部屋も小遣いも用意するから是非ウチで暮らせば良いと郁斗に言ってくれた。

治安上の問題も心配していた両親は、ミイナのその誘いに感謝して郁斗を日本に残して海外へと旅立っていく。

かくて、郁斗は有澤家にご厄介になり、こうして有澤直営の澤乃城学園へと通うこととなったのだが――ここで一つ、問題がある。

ミイナには招かれた。

ただし、ミラノには苦い顔をされたのである。

「まあ、お嬢様もお年頃ですし、屋敷に馬鹿な男子が転がりこんで来たら迷惑するのは理解できますけど」

「郁斗君、年齢偽って無いですよね？」

「精神年齢四十歳くらいを想定してますが」

自嘲気味の笑みは、実に子供の顔に似合っていなかった。

由宇は頬を引きつらせて苦笑する。

「……とにかく、お嬢様が郁斗君を嫌っているとかは、無いですかね？　むしろ……」

「由宇」

「は、はい！」

前を歩いていたミラノが、振り返らぬまま言葉を続ける。

「新人生に悪戯に先入観を植え付けるものではありません。それは先輩として相応しい態度ではないでしょう——私の言っていることが、貴女には解りますね？」

「……はい」

「郁斗、貴方も」

「勿論です、お嬢様」

頷く以外、本人の背後で迂闊な内緒話をしていた二人に出来ることがあるはずが無かった。

ただ、内心で。

——やっぱり『はい』っていう言葉以外欲しくなかったんじゃないかな。

そんなくだらないことを、郁斗は考えたりもした。



中等部から編入する生徒が少ない———と言うか、通りで実質居ない訳だ。

教師の板書の音、そしてそれをノートに書き写す生徒たちの筆記具が擦れる音。

教室の片隅、体よく確保できた窓際の一番奥の席で、郁斗は一人納得したと息を漏らした。

ぱらぱらと、朝に学生課で受け取ったばかりの教科書を捲る。

内容は、どう考えても中学一年生が始業式初日に学ぶ内容ではなかった。

（これ、高校で習う定理だよな……？　なるほど、義務教育期間に習う内容は全部初等部の間に終わらせてしまおうって訳か）

周りのほかのクラスメートたちが、何の戸惑いもなく授業に参加しているのを見るに、恐らくそう言う事なのだろう。

（お嬢様があれだけ念を押す理由も解るわな、こりゃ）

普通一般の小学校で全うな教育を受けてきただけの子供は、この学園の授業にはどう頑張っても着いていけない。

根本的な知識の度合いが違いすぎて、これでは習うことを理解できないだろう。

早期エリート教育。立場あるものに相応しい教育をと、これだけ徹底していれば、有澤ミラノが誇りに思うのも当然に感じられた。

（まあ、でも。この場合は奥様の言ってたことが正解かな……）

最後のページまでまくり終えた教科書をパタリと閉じる。

その音が気になったのか、数学担当の中年教師が一瞬だけ郁斗の方へ顔を向けたが、何事も無かったかのように――まるで、そこに生徒など居なかったかのような態度で、直ぐに視線をそらした。

学ぶ者たちが選ばれた優秀な人材であれば、それを教えるものも、また。

（邪魔者扱いかよ。ま、そうだろうけどさ……）

一瞬だけ絡んだ中年教師の視線は、明らかに苛立たしげな感情を含んでいた。

郁斗――理事長たつての引きによって編入してきた生徒の存在が気に入らない、と言うことだ。

郁斗は小さくため息を吐く。

机の上で片肘をついて、手にはシャープペンシルの一本も握っていないければ、そもそもノートも教科書も開かれていなかった。

意味も無く窓の向こうの、やたらと見晴らしの良い広々としたグラウンドと——その向こうの林に視線を送り、退屈極まりないといった体の、不真面目な授業態度。

（退屈なんだから、仕方がないだろう）

特に理系分野は郁斗の得意とする分野だったので、今更高校一年生レベルの数学の授業内容など、まともに聞く気にすらならない。

子守唄の代わりにでも使ってやるのが、せめてもの申し訳、と言うヤツだった。

机の上で組んだ両腕の間に、頭を下ろす。

入学手続きのために朝早くから学校に来ていたため、眠いのだ。

そんな状況でエリート学校宜しく入学初日から普通の授業に参加するなど——ましてや、授業内容は遥か三十年以上前に学びきた内容では。

まぶたを閉じるその寸前に、郁斗はもう一度だけクラスの様子を伺った。

現代のスレた少年少女の姿など、ここには存在しない。

みな真面目に前を向き、教師の言葉を熱心に聴いて板書をノートに書き写している。

郁斗の席——中等部からの途中編入のため、一番最後の出席番号。故に一番端の席——からは、前だけを向いている彼らの頭しか見えない。

（黒、黒、緑、黒、黒、黒、オレンジ、黄色、黒、群青……）

世界は相変わらず、虹色をしていた。

二話（後書き）

まったり進みますが……しかしアレだね。

本当に、何処まで書けばいいのやら、或いは何処まで書かなければいいのやらって感じで、判断に困る。

三話



へキミにはその資格がある。可能性がある。シオの潮流を御する力
——魔法力を有しているのだから

魔法力と来た。

確かにこの海の中は、そういういかにもな空間だったから、そう
いう言語が出てくるのもおかしい話ではないが——。

へおや、疑っているのかい？ シオの激流の狭間を抜けてこの海底
に固体を保ったまま辿り着いたと言うのに、自身の秘めた力を、ま
さかキミは信じないと？

信じる信じない以前に、僕には似合わないだろうと言う話だ。
魔法なんて。

最先端科学の探求を自らの務めとしてきた人間に、あろうことが
そんなオカルト染みた単語を——。

へ状況を考えたまえ。今まさにこの時、この場所に私とキミが居る、
対話を繰り広げていると言うこの状況を

……確かに、それを言われると辛い。何も反論できない。
海の中で何かと対話。実にファンタジー。オカルトの極地だ。

へ一応断っておくが、私は夢でも幻でもない。現実にはちゃんと存在する——もっと言ってしまえば、私はこれでも、人の英知が作り出した技術の結晶なのだよ」

——興味深い話をする。

明らかに知性やユーモアを感じさせるこの存在が、人の手によって創られたものとは。

人はいつの間に、完全な人工の知性の創造に成功したのか……よもやそれが、魔法とやらの仕業と言うのか。

「理解が早くて実に助かる。その通りさ。私はね、キミと同様に魔法力を持つ者達の積み上げた文明の、恐らくは最後に近い位置の成果と言うべき存在だ」

はは、なんだ。

つまりお前は、自分のことを『魔法使いが作った物』と言いたい訳だな。

「——そう言う事だ。銀の魔力光を放つ、偉大なる才を秘めた魔法使いよ」



瞼を焼く銀色に魘されて、目を開く。

硬くなった身を起こして、あたりを見渡せば——教室に、人の姿がない。

窓の向こうへと視線を送る。

空は、そろそろ茜色に染まり始めていた。

光を反射した、カーテンの下ろされていない窓に、眠たげな顔をした自身の姿が映っていた。

歳若いと言うよりは、いつそ幼い十二歳の少年の姿が。

東洋人らしい童顔の顔、しかし額に掛かる汗で張り付いた髪の色は。

銀色の、髪。

鬱陶しげに掻き揚げても、窓にすら透けて見えるその銀色が変わるはずがない。

郁斗は、生まれながらに銀色の髪を有していた。

だが、そういう風に見えるのは、どうやら郁斗だけのようで。

他の人間には、郁斗の髪も、瞳も、確りと極当たり前の、他の世間一般の日本人と、両親祖父母親戚一同達と同様に、黒髪黒目に見えるらしい。

家族の中で息子一人だけが銀髪に生まれてくれば、誰かが騒ぐに違いないから、いちいち確認するまでもない事実だ。

つまり、自身の髪の毛が銀に輝いて見えるのは、郁斗自身だけなのである。

郁斗にはなぜか、自身の髪の色が銀色に、見えてしまうのだ。

色覚の異常。或いは精神的な病。

可能性は想像の数だけ存在して、だから郁斗はその原因を特定するべく幼いころから歳に見合わぬ天才を示しすぎてしまった訳だが――それはともかく。

幼少期を過ぎ去るに至り、活動範囲が広がっていくに至り、郁斗は更なる視界の異常に気づくこととなる。

すれ違う誰かの赤い髪。
隣を歩く誰かの緑の髪。
向き合う誰かの紫の瞳。

郁斗の視界に映る人々の髪の色は、或いは瞳の輝きは、時に黒と黒だけでは完結しない、極彩色の世界を作り出していた。

世界は、虹色をしていた。

街を行きかうそのほとんどが間違いなく確実に日本人に違いないと言うのに、郁斗には彼らの髪が日本人にはあるまじき——否、普通の人間にはあるまじきカラフルな彩色に見えてしまう事が多々あった。

黄色や赤系統ならまだ納得がいくが、青や緑や紫の、生え際から先端に至るまで自然な色に染まった髪の毛など、人類という生物的な意味で自然ではない。

だが現実には、世界は虹色をしている。

極彩色の髪を持つ当人達ですら気づいていないようだったが、郁斗の視界の中だけでは、確かに、世界は虹色に煌いていたのだ。

自らの銀色の髪など、その代表とすら言えるだろう。

「今更、だよね」

銀色の髪を鬱陶しげに払って、郁斗は立ち上がる。

長時間椅子に座ったままの姿勢で眠っていたから、随分と身体が固まっていた。

年寄りじみた仕草で伸びをして——事実、それほど若くは無いんだよなと言う現実には苦笑する。
若くない。若くは、ないのだ。

なにせ生まれる前を併せれば、そろそろ四十台も半ば過ぎ。とても若いとはいえないだろう。

見かけ十二歳の少年に過ぎなかったが——しかし、そう。

郁斗には生前、別の人生を送っていた記憶が確かに存在していた。

何処かで生まれて、誰かとして生きて、そして死んだ三十年余りの人生の記憶が。

幼い十二歳の一年郁斗ひととせの中に、確かに存在したのだ。

前世の記憶を有したままの転生、などと言ってしまうのが解り易いか。

郁斗は十二歳の中学一年生に過ぎず、しかしそれと同時に、三十余年を生きた何処かの誰かでもある。

それが郁斗という少年の、自己に対する認識だった。

おまけに生前の三十年近い人生において、自身はどうやら高度な科学技術の知識を身に着けた研究者としての人生を歩んでいたらしく、つまり今の十二歳の郁斗が周囲から天才と渾名されるのは、それが真の理由だったのである。

天才、などと誉めそやされるたび、周りの同年代の少年に比べて三十年分のズルずるをしているのだから当然だ、などと羞恥心を覚えてしまうのも仕方ないだろう。

冷静に考えるまでもなく、前世の記憶を有するなど稀有で異常な状況の筈で、だからそれに比べれば、視覚に異常があることなどたいた問題でもないかなと、郁斗はある意味で楽観的な思考を持っていた。

——むしろ、そのくらいの楽観的な思考を心がけなければやっていられないと言う気分のほうが大きかったかもしれないが。

体は子供、頭脳は大人、などという漫画な状況は、体験して見れ

ばかなり息が詰まるもので、ある程度恣意的に阿呆をやらなければ心が参ってしまう。

それに加えて、今は更にセレブリティなお嬢様ご一家と一緒に生活などと言うストレスの溜まる状況も待っているのだ。

「帰りたくねー」

人気の無い教室で、本音がポロリとこぼれる。

そう言いながらも、帰る仕度の手を止める事はなかった。なぜなら帰宅時間が遅くなると、ミイナのお説教は確実なのだ。

時計を見るまでもなく、時刻は既に夕刻過ぎ。

登校時は有澤家の送迎車にご一緒させてもらっていたが、帰りは学園専用の通学バスを使用せねばならない。

ミラノとは——高等部と中等部は、授業カリキュラムが全く異なっているため、終業時間が重ならないせいだ。

ついでに、ミラノは学生会の会長として放課後はなにやら仕事が待ち受けていると言う話だったので、当然従者の由宇もその手伝いがあるだろう。

現状は帰宅部所属に過ぎない郁斗は、一人で帰宅の脚を確保するしかない。

通学バスは、行って駅前から郊外の住宅地まで。

山の中腹にある有澤のお屋敷に帰宅するには、駅から市営のバスに乗り換えるしかなかった。

「タクシー使うか？」

実を言えば『お小遣い』と言う名目で、ミラノから黒いICカードを事前に手渡されていた。

限度額までは好きに使ってくれてかまわないと——この色、限度設定無いですよねとは怖くてとても聞けなかったが。

「いっそ通学用に單車でも買って……ああ、僕まだ十二歳だったっけ」

ともかく、通学バスの停留所まで急ごうと、夕焼けに染まる廊下を早足で進む。

——ざああん。ざああああん。

波の音が、聞こえた。

「……今日は、多いな」

郁斗はくたびれた息を吐く。

知識は異常であり、視覚もおかしい。

ならば、聴覚にもおかしいことがあっても特におかしくはない。

時を選ばず、耳の奥に潮騒の音が聞こえる自身の状況を、郁斗はそんな風に理解していた。

それに、波の音なら理解できなくも無かった。

あの海の底の幻想的な光景を、郁斗は確りと記憶していたから。

前と今の間に訪れた、幻想的な海の底の記憶を———そこの、会話を。

——ざああん。ざああああん。

「……ほとんど忘れちゃってるけどさ」

鳴り止まない潮騒をわずらわしく思いながら、そう自重する。

もう十二年も前の話なのだ。

しかも、半分眠ったような思考の中で交わした口約束に過ぎない。

一字一句漏らさず記憶しておくなど、なかなか無理があると言う話だろう。

「せめて、名前くらいなあ……っ」と

「にゃっ?」

とん、と。軽く無い衝撃。

階段を指して廊下の角を曲がろうとして、何かにぶつかった。

蹈鞴を踏んで、バランスを取り直して前を見る。

「あ痛たたたた……」

同年代と思わしき少女が、しりもちをついていた。

大またを開いて腰をさすって、短いスカートが捲くりあがって――。

――綺麗なピンク色が、目を引いた。

「ごめん、大丈夫だった？」

三十路過ぎの男の精神で、少女の顔だけを見て手を差し伸べた。

しかして少女は、郁斗の差し出した手に自身の小さな手の平を重ねてくれた。

「平気。こっちこそ、ゴメンね。あたし以外に人が残っているなんて思わなくて」

階段の上でぶつからなくて良かったねと、人懐っこい笑みを浮かべている少女を、郁斗は引っ張り上げる。

見たまま、声を聞いたままの、快活そうな小柄な少女だった。

胸元のリボンタイから把握するに、どうやら郁斗と同学年であるらしい。

「入学初日から女の子に怪我をさせなくて、幸いだったよ」

冗談っぽい口調で、心底の安堵が籠っていた。

何かにつけ、往々にして、男女の間でいさかいが起これば男が悪いと風聞が立つのが世の常だ。

訴えられでもしたら、たまらない。

手を握り合ったままの少女は、郁斗の顔を興味深げに眺めていた。

「ど、どうかした？」

「んんん説明会のときいなかったと思うけど……うん、あのさ、ひょっとして今、入学って言った？」

気のせいだったら申し訳ないけど。

「うん。……ああ、ひょっとして、キミも？」

なんとなく、郁斗は少女が言いたかったことに気づいたので、自分から尋ねて見た。

主語を交えず、しかし確かに相互理解を得られたらしい。

「そ、あたしも中等部からの編入組み！ お仲間さんに会うの、初めてだよ！」

綺麗なピンク色の髪を揺らして、少女は嬉しそうに笑った。



三話（後書き）

オリジナルの公開を始めてまあ二日目なのですが、気づいた事がひとつ。

原作と言う共通認識も無い上、冒頭の展開でまだネタが出揃って
もない、つーこともあって、ぶっちゃけこの後書きに書くネタが
……。

まあ、そんななのでしばらくテキトーに当たり障りの無いことば
っかり書くことになると思います。

四話

「郁斗」

「はい、お嬢様」

陶器の皿を、フォークとナイフがはじく音が響く。

有澤家の夕餉の席は、気品に満ちた調度品に囲まれた広々とした食堂で静かに進んでいる。

「貴方も学園に通い始めてもう一週間になります。――勉強のほうは捗っていますか？」

「勉強……ですか」

食事の合間、ふとミラノに尋ねられて、郁斗は一瞬言葉に詰まった。

「もう飽きちゃったわよね？　良いのよ、別に無理して授業になんかでなくたって」

郁斗が言葉に詰まっている間に、ミイナがぼわぼわと微笑みながら口を添える。

あまりにも郁斗を甘やかした母の言葉に、ミラノの眉がピクリと揺れた。

「頭がよければそれでよい、という訳ではありません。それに相應しい生活態度、授業態度を心がけなければ――私の言っていることが、貴方には解りますね？」

「ええっと、はい」

お決まりの言葉に、郁斗は若干頬を引きつらせつつも頷くしかなかった。

ここ一週間ほどの自身の生活態度。知られたら事ことだなあと、内心

で祈りつつ。

「返事はご立派なようですが……ですが郁斗。私の耳にはなぜか、貴方がまるで授業に参加していないと言う報告が届いているのですか？」

「あ~~~~~……」

バレてら。

誰だよバラしたのはと思いつつ、ふと、食堂の脇に控えていた由宇と視線が合わさった——直ぐ逸らされた。

「聞いているのですか、郁斗！」

「ああああ、はい、申し訳ありません！」

とりあえず平謝り。

現実問題として、郁斗はある程度出席する授業を選んでいたから、誤魔化すこともできない。

この場合は頭を下げ続けて、何とかミラノの怒りが通り過ぎるのを待つほか——。

「でも、郁斗君はもう、全部の授業のレポートを出し終えてるんじゃないお？ 良いじゃない？ 頑張ったんだからあ、ながあいながあ~~~~い、夏休みってことでえ。あ、ゴールデンウィークの方が先かしら？」

ミイナが余計な首を突っ込んできた。ミラノの怒りに火に油である。

「入学早々四月の頭から九月の初めまで授業を欠席するなど、許されるはずが無いでしょう！」

「でもでもお、ウチの学園、そういうシステムだし」

「自主学習の審査制度は、何も授業をサボるためにあるものではありません！ 学習効率の円滑化を図るためにあるのです！ 良いですか郁斗！ 中等部の授業のレポート審査が既に終了しているのなら、学生課に取り合って高等部……いえ、大学の講義に参加するように

なさい！ 決して無作為に遊び続けるような無駄な時間を作ってはなりませんよ！」

「ええっと、はい。まあ、一応そのつもりは、ありますけど……」
大学の講義目録を眺めても、特に受講したい講義とか見当たらなかったんだよなどは、口が裂けてもいえなかった。

ギロっと睨み付けてくるミラノに蛙の気分で頬を引きつらせながら、郁斗は視線を合わせ続ける。

「……なら、結構。有澤の家に住まうものとして、貴方が優秀な成果を出してくれるのは喜ばしい限りです。今後ともその調子で、気を抜かぬよう——下らぬ遊びになどにうつつを抜かすことなく、勉強にまい進するのですよ？ 解りますね？ 私の言っていることが」

「勿論です」

内心で安堵の息を漏らしつつ、郁斗は勤めて真面目な顔で頷く。

ミラノは郁斗の態度に、宜しいと一つ頷いて——。

「ところで、聞けば郁斗。中等部の授業時間中に中央塔のカフェテリアに出没しているらしいではありませんか。——女と一緒に」

「うわぁ」

本題はそっちかと、郁斗の背中を冷や汗が伝った。

ミラノは何時もどおりの涼やかな態度で——しかし、得も言えぬ情念染みたものが湧き上がっているように見えるのは気のせいだろうか？

こう、ジメっとした感じに。

「授業をサボって女と一緒にティータイム。結構なご身分ですこと」
「いや、その、それは……その。たまたま暇な時間が重なっているとか、その」

「毎朝ホームルームが終了した傍から、廊下で待ち合わせていると伺いましたか？」

誰からだ。

食堂の勝手口から退散していく由宇の背中に、思いつき怒鳴りつけてやりたい気分だった。

「あら、郁斗君もうカノジョさんが出来たの？」

「ちょ、奥様？」

何故そこで嬉しそうな声を出すのか。

案の定、ほわほわしたミイナの言葉に、ミラノの柳眉が逆立つ。

「いや、あの。お嬢様。さなちゃんとはですね、別に……」

「さなちゃん？」

「あ、いえ……紗那沙^{さなざ}、さんとは……」

薮蛇だった。

ものすごい視線でにらみつけられて、郁斗はあわてて言い直す。
「あら、まあ。郁斗くんったら紗那沙ちゃんとお付き合いしてるの？」

「いえ、お友達なだけです。……というか奥様、さなちゃんのご存知なんですか？」

「ええ。紗々崎紗那沙ちゃん、でしょお？」

もちろん、と両手を胸の前でぽんと合わせながらミイナは言う。

「紗那沙ちゃん、とっても素敵な絵を描いてくれるから、特待生として学園に来てもらうことにしたの。それに、紗々崎さんのお家は、高等部にお姉さんも在籍しているのよ」

「ああ、そういえば従姉妹のお姉ちゃんが居るとかなんとか」

件の少女自身から聞いた記憶があると頷くと、ミイナもそうなの、と楽しそうに笑った。

「紗々崎さんのお家は、お隣の領……お隣の街の地主さんでね。ウチとは、昔から付き合いがあるのよ」

お仕事の関係でも色々とお世話になっていると、笑うミイナとは対照的に、最初に話を振ったミイナの顔は、どんどん渋面へと変わっていった。

「紗々崎など……あんな成り上がりの家の娘など、郁斗には相応し

くありません」

「ミラノちゃん。よそ様を成り上がりだなんてそんな、死んだお爺様みたいな風に言うものじゃないわよ」

「私は事実を口にしていただけです。あの拝金主義者たちが、一体どれだけ当家に負担を与えているか、お母様だって解っていらっしやるでしょ？ それなのに何故、城乃下^{きのした}の領内に自ら招き入れる……」

「ミラノちゃん」

溜まりに溜まったという態度で苦言を呈そうとしていたミラノを、ミイナは笑顔のまま退ける。

普段どおりのほんわかとした顔に、しかし感じる圧力は歴史ある家を背負うものに相応しいものだった。

「一時の損得勘定だけで物事を見てはいけないと、何時も言っているでしょ？ 確かにあの人たちが城乃下^{きのした}に居ることで、それなりの負担も増えることになりましたけど――それに見合う利益も、我が家は充分に得ているわ」

軽い態度に見合わぬ、重い言葉。

しかし母親の決定に、娘は否定的な見解を示す。

「……私には、とてもそうは思えません。郁斗のことだって」

「ミラノちゃん！」

「は？」

話の輪から置いてけぼりを食らっていると思ったら突然に自分の名前が出てきて、郁斗は面食らった。

「僕が……えっと？」

家主親子二人の顔を交互に伺っても、しかし両者共に何も答えてはくれない。

特にミラノなど、郁斗と視線すら合わせようとせず、夕餉の席を立とうとする。

「ご馳走様です。——郁斗、貴方はもっと、自分の立場に見合った相応しい人間と友誼を結ぶようになさい。紗々崎の小娘などと、必要以上に親しくなることなどないように」

「ミラノちゃん！……もお」

ミイナの嗜める声にも振り返らずに、ミラノは食堂を出て行ってしまった。

「ごめんね郁斗君。ミラノちゃんったら拗ねちゃって」

「……いえ。その……まずいん、ですかね」

何が、とは言葉にせずに、郁斗は恐る恐る尋ねる。

ミイナに問うまでも無く、閉じられた廊下へ続く扉をめていれば、答えは解り切ったことかもしれないが。

先ほどの二人のやり取りを見ていれば、それはなお更だろう。

「ん~~~~」

だがミイナは小首をかしげて少しの間天井を見上げて悩んだ後で、視線を郁斗にあわせて尋ねた。

「郁斗君は、紗那沙ちゃんと仲良くなれて、良かった？」

「……ええつと」

その質問は、ただの単純な疑問にも聞こえて、しかしなぜだか、究極の選択を押し付けられているようにも思えた。

紗々崎紗那沙。

それが、郁斗にとってどういう少女かといえば。

何と応じるべきか答えに惑い、考えを整理しようと視線を逸らして——ふと、郁斗は中庭に面した大窓に映る自身の姿を目にする。銀色の髪 of 少年の、姿。夜の闇中ですら、はっきりと解る銀色の輝き。

普通の人間にそれを語れば、異常ととられるに違いない。

——けど。

「その……はい、そう……ですね」

心底から、頷く以外に答えは無かった。

「そう」

ミイナは、郁斗の言葉に満足そうに頷く。

「良かったわね、郁斗君。お友達が出来て」

本心から言ってくれているのだろうと、そう、思えた。



「ウチと有澤さん？ どうだろ、紗々崎ささざきって言ってもウチのパパは家を継げなかった次男坊さんだからにゃ。本家のお仕事のお付き合いか、あたしは知らないや」

「うわ、使えねえな淫乱ピンク」

「淫乱言うな！」

キシャーっと小動物が威嚇するときのポーズで吼える。

ゆれる桃色の髪も艶やかなこの少女こそが、紗々崎紗那ささざきさなその人であった。

入学初日の放課後に知り合って以来、郁斗と紗那さな沙はこうして授業をサボってカフェテリアで席を同じくしていた。

先日アレだけミラノに釘を刺されたというのに全く生活態度を改めようとしないうちあたり、郁斗も案外と神経の図太い少年だったりする。

「うう……せつかくの銀髪のイケメンだからって勇気を出して話しかけてみたらこんなに口の悪い人だったなんて」

「イケメン言うな。大体それを言ったら僕だっと思うところはあるぞ。遂に出会った同じ立場の人間が、よもやこんなに淫乱ピンクだ

ったなんて……」

「だから淫乱、淫乱って言わないで！ 周りに聞こえちゃう！」

「いや、むしろキミが叫んでる方が目立ってるし！ 淫乱の上に露出癖でもあるのか」

「しまった、図られた？」

因みに、カフェテリアは中央塔三階層目から続くラウンジに存在する。

昼休みの時刻前——つまり授業時間中から中等部の生徒二名が制服姿で淫乱などと口走っている姿は、悪い意味で目立っていた。

「こんな淫乱が中等部から編入してきた特待生なんだから、世の中解らないよなあ」

「まだ言う……。って別に、編入組みって言ってもあたしはいくくと違って勉強できるわけじゃないし。アレだよ、一芸入試ってヤツ」

「勉強できるだけよりも、さなちゃんみたいに芸術とかの才能が認められてるほうがすごいと思うけど」

「どうなのかにゃ、あたしは好きでペン動かしてるだけだし。案外本家の叔父さんとかがお金積んだお陰とか言われても、全然驚かないよ」

ふはーっと、だらしない姿でテーブルに突っ伏しながら、紗那沙は言った。

「お金、ねえ」

郁斗は開きっぱなしだった義体工学に関する技術書を眺めながら、つぶやく。

「うん、ウチの実家って、けっこあああ〜くどおい手段で荒稼ぎしているみたいだし。何の仕事してるのか、さっぱり解らないけど」

「解らないくせに自分の実家をあくどいとか言うのやめようよ」

「だあ〜って、従姉妹のお姉ちゃんとかに聞いてみても、全然教えてくれないんだもん。笑って誤魔化されるんだよ？」

怪しいでしょ、と聞かれたら、確かに聞く限り怪しいとは思えなかった。

「だから、有澤さんちみたいな歴史のある家から見れば、ウチの一族って怪しい成金呼ばわりされても仕方ないと思う。ホント、そのお金どっから出てきたのって感じだもん」

「そーいや、紗々崎なんて家、さなちゃんに会うまでは、僕も聞いたこと無かったな。父さんの仕事の関係でセレブの家系とかの名前は一通り知ってるつもりだったけど」

「でしょお。ウチの実家ってば、社交界とかにも全く誘われないよ。うな家みたいなのさ」

「社交界、ねえ。あれはあれで面倒な世界だから、近づかないで済むならそれに越したことは無いと思うけど」

「……あたし今、イケメンにやさしく慰められてる場面？」

「いや、適当にスルーされてるだけの場面」

「いっくんてば、本当に酷いイケメンだにゃあ！」

ガバッと跳ね起きるころには、すでに投げやりな口調はあさっての方向にサヨナラしている。

紗々崎紗那沙という少女の、それがわかりやすい有り様だった。



四話（後書き）

引き続き牛歩の歩みで。

一話平均四千文字程度換算で更新しってペースになりますかね。

あ、そういえば初のオリジナルってことで、私の書いたものを目にするのも初めて人もいるでしょうなので、一応書いておきます。

私は感想板に記された感想に対して個別に対応することはありません。

理由はいろいろあるんですが、まあ、経験則でこれが自分にあっている、と思っているやり方なのでそうしようかと。

感想自体は全部読ませていただいていますし、私的にも返答しないとまずいなど判断した場合はこちらを利用してのことになるかと思っています。

感想板をご利用の方は、どうぞその旨、ご了承くださいませ。

五話

入学初日、放課後の廊下。
郁斗と紗那沙は出会った。

「一年郁斗君かあ。『と』が三つ並んでるから、じゃあ『いっくん』だね！」

「『と』を三つ並べたって言う必要あったのか、さささのささんよ」「あたしそんな変な名前じゃないよ！」

出会いがしらにぶつかって、なんとはなしに一緒に通学バスに揺られながら、それでなんとなく、互いに自己紹介。

聞けばこの紗々崎紗那沙（ささきさなさ）と言う少女は、芸術方面の才能を買われて推薦をもらった、特待生なのだそうだ。

「芸術特待生か。中学生に高校の勉強教えて見たり芸術家とかスポーツ選手の卵を抱えて見たり。手広くやってるよね、この学園も」

「理事会には財閥系の出資者が揃ってるらしいからね。きっとお金が有り余ってるんだよ」

「金持ちといえば、芸術家のパトロンってやつね」

「そうそう。それに学者とか錬金術者とかにお金を突っ込んで散在するとか、お約束でしょ？」

「ごもっとも。」

お互いの立場を鼻で笑い飛ばせる程度には、二人は気が合った。

「ま、結果さえ出せば経過には口を出さないって言うんだから、良いパトロンではあるんだろうけど」

「子供にお金だけ渡して後は好きにしろおゝとか、投げやりも良い所だよねえ」

澤乃城学園は成果主義を推奨していた。

たとえば授業に参加しなくても、各分野に応じて必要な成果――それは作品の発表であったり、レポートの提出であったりする――を一定期間ごとに示していれば、単位を履修したこととなる。義務教育期間中の中等部の生徒であっても、勿論それは適用された。

「春休みに書き溜めたイラスト持ってたなら、がっぱり授業免除が貰えて助かったにゃ」

「ああ、一芸入試の途中編入だと辛かろうね、ここの勉強」
なにしろ内容は高等学校で習うもの。普通の小学校を卒業したばかりの生徒には、荷が勝ちすぎるだろう。

特待生資格の得意分野での成果でフォローしてくれなければ、ともに卒業できるか危ういレベルだ。

「でも一応、編入組みには補習とかもあるんだろ？」

「うん、任意だけどね。……必要単位残ってるから何科目かは試験通らなきゃならないし、殆ど強制参加なんだろうけど……って、いっくんも中途編入組みだよな？ 授業解らなくない？」

「鼻で笑うレベル」

「厭味だ！ 今あたし、厭味言われたよ！」

互いの学力格差に愕然として喚く紗那沙に肩をすくめて返して、郁斗は視線を少し落とす。

紗那沙の、膝の上へと。

「いやでも、実際のところ上手いもんだね」

素直に感嘆の言葉が漏れた。紗那沙は照れ笑いを浮かべる。

「ん、手癖で指を動かしてるだけだからにゃあ。イケメンに褒められるのは嬉しいけど」

通学バスの奥。

郁斗と隣り合って二人がけの席に座っていた紗那沙は、ひざの上で小さなスケッチブックにペンを走らせていた。

郁斗と話す傍ら、まったく視線を落とさずに指を動かしていけばそこには郁斗の姿かたちが書き写されていく。

「これに色をつけて売ったら、独創的でスバラシイ〜とか言われてお金がついちゃうんだって。実家のお仕事取り仕切ってる叔父さんの知り合いに馬鹿売れなんだとか」

笑うよねーと、何処かの誰かを嘲笑うような態度で、紗那沙は言う。

「額縁に入れば見栄えはすると思うよ、実際」

「あはは、ありがと。うん、褒められるのは嬉しいんだよホント。好きでやってることだし」

ただ、ねえ。

「色使いが独創的、なんて言われる訳ですよ」

言いながら紗那沙は、足元に置かれていた学生かばんの中からカラーマーカーの束を取り出す。

慣れたしぐさで、マーカーを持ち替えながら、書いたばかりの郁斗のスケッチに色を被せていく。

肩から上、窓から夕日を受けた郁斗の整った顔立ち。

紺のブレザー、ネクタイ、白のシャツ。

夕日を反射する肌の色。深い知性を感じさせる瞳。

神秘的ですらある、光をはじく――丸で自ら発光しているかのような。

「……お前」

「独創的だなんて、笑っちゃうよね。あたしは見たままを描いて写しているだけなのにあ」

目を丸くする郁斗の顔の横に、自らが描いた郁斗のカラースケッチを並べる。

その、どちらもが、なるほど、確かに見たままに。

スケッチブックに描かれた郁斗の憂い顔に掛かる髪の色もまた、

銀色の輝きで彩られていた。

「この、淫乱ピンク……！」
「にゃっ？」



——つまりは、そういうことだ。

紗那沙も郁斗と同じく、世界が虹色に輝いて見える、そういう類の人間だったのだ。

お互いの認識の同意にはじめ二人は、酷く驚いて——ついで、笑って、そして親しみを覚えた。

「にしても、居る所には居るんだな、見える人」

「色つきだからって、見えるとは限らないみたいだしねー。いっくんが初めてだよ、見える人って」

「まあ、僕もキミが初めてだけどさ、見える人に会ったのは」

たまたま隣のテーブルに座っていた発色の良い紫の髪の女性にちらりと視線を送りながら、二人は密やかな声で言葉を交わす。

カフェテリア。その奥の大学部の塔に出入りする人々の流れ。

黒髪黒目の日本人たちが行きかう中に、しかし二人には、そこに色鮮やかなものが混じっているのが見えていた。

日本人には、いやさか外国人ですら——つまり、自然に考えればありえない色鮮やかな髪。

「探せば、他にも見える人とか居るのかにゃあ？」

「どうだかな。仮に見えたとしても、普通は黙っているような気もするし。どっかの淫乱ピンクみたいに絵に描いちゃうとかはちょっとちょっと無い気がするけど」

「遠巻きにあたしのこと普通じゃないって言ってるよねっ？」

「ははは、ご冗談。さなちゃんはどっから見ても普通の淫乱ピンクじゃないか」

「ひとを普通に淫乱扱いするのやめてよ！」

桃色の髪を振り乱して——といっても、見えているのは郁斗だけなのだろうが、ともかく淫乱などと開放的なカフェテリアで叫んでいれば普通に目立つに違いなかった。

郁斗は礼儀正しく忠告なんてしてやらなかったが。

——ざああん。ざああん。

「……っ」

「いっくん、どうかした？」

「どうも……いや」

思わずあたりを見渡してしまった郁斗は、紗那沙の疑問に言葉を濁してしまおうとして——しかし、ふと思うことがあって言葉を止めた。

紗那沙は、郁斗と同じ世界を共有している。

ならば。

「さなちゃん、最近波の音とか聞こえたりしない？」

ひよっとしたらと期待をこめて。

「いっくん、キミ、疲れてるんだよ」

黙れ淫乱ピンクと、とりあえず頭を叩く事になった。



〈仮にキミが一人で海上——つまり現世を目指そうと試みたところ

ろで、精々途中で潮流に揉まれて我を失い、海魔に成り果てるのがオチさ」

海魔。かいま

初めて聞く単語だが、何故か意味は理解できた。

きつと、言語による対話ではないからだろう。

上を見上げる。

ちらりと舞い散る生命の残滓の柔い煌めきだけが便りの、このくらい海の底から見上げようとしても、見えるはずも無く。

「水深が上がるにつれて、現世へと近づいていくと考えれば——当然、生命の流れたるシオの潮流も上層であればあるほど激しくなるのが当然」

それを、一人で泳いで渡れるかと尋ねられてしまえば、当然、言葉につまりもするだろう。

では、結局どうしろと言うのだ……否。

どうして、くれるのだ？

お前は僕に、何が提案できるんだ？

「キミは、本当に話が早くて助かるよ。でもその前に一応確認しておこうか。キミは今の自分を維持したまま、次の自分に生まれ変わりたいと——それで、間違いないんだね？」

尋ねられて、さて、と考える。

今の自分。先ほど死んだばかりで、実感はあるのに、どうしても自分が死んだと言う現実を受け入れられていない。

だからこそこんな夢現な世界に取り残されているのだろうし、ならば、当然。

出来ることなら。

出来るから、尋ねているのだろうか？

へ出来る。私が力を貸せば確実に可能だと断言できる。その手段がある―――が

ホラ来たと、むしろ僕は笑いたい気分ですらあった。

善意の申し出ではない、これはつまり、最初から取引だったのだから。

そんなことにはとくに気付いていたし―――だからこそ、この言葉の主を僕は信用できた。

へ話が早くて助かるのは事実だが―――俗物に過ぎると思われるように、いや、事実か

自嘲気味の声。

だがそれもつかの間、気を取り直すような気配と共に―――。

へ私はキミを生還させることが可能であり、そしてキミは、私の望みをかなえることが出来る。―――そこでキミに、一つ提案がある

足元を埋め尽くすマリンスノーが、吹き散らされていく。

海底に、まるで嵐が訪れたかのような幻想的に過ぎる情景。

へ此処は静かで、落ち着くけれど―――些か、長く居すぎた気もする。独りで此処に居続けるのは、些か飽いてしまったような、そう思ってしまうば……ね？ 解るだろう。だが、私は独りでは動くこともままならないのさ

その衝撃から身を守るべく、咄嗟に僕は顔を両腕で覆い、そして、二本の腕の隙間から、そして、僕は、僕は見た。

吹き散らされたマリンスノー。

その内側に閉じ込められていた、眠っていた、横たわっていた、その、巨大な――。



「見える、聞こえる……そのうち、触れたり嗅いだり出来る人も出てきたりして」

「どうだか。―――実際、幻聴って言われたって否定できないんだ」何しろ聞こえるのは、郁斗自身しか居ないのだから。

放課後のカフェテリアで、郁斗と紗那沙はそんな会話を繰り広げていた。

郁斗は波の音を時々耳にする。

時々、本当に時々で、規則性も何も無いから、まったく落ち着く話ではない。

「城乃下市は、普通に山の中だもんねー」
きのした

海とか見えないし、と紗那沙は否定も肯定もしない。

彼女自身、郁斗と出会うまでは自身の目がおかしいのだと考えていたから、自分がそうではないからといって、簡単に郁斗の言葉を否定したりはしなかった。

無いことも無いかも知れないと、本気で思っている。

「よく考えたら僕、城乃下きのしたから出たこと無いから、海を見た記憶って無いんだよな。父さん達についていければ、飛行機の窓から見えたりしたのかもしれないけど」

ついでに、前の人生では海の見える場所で働いていたこともあつ

たが。

「山に囲まれてるから暑いしね。夏になったらプール行こうよ、プール。友達居ない同士、二人っきりで寂しく」

「いや、勝手に人の友達減らされても困るんだけど。つか、さなちゃん、僕と違って授業にもある程度は参加してるじゃん。クラスの友達とかいない訳？」

「やーホラ、他のクラスメート、皆小学校からの知り合いみたいで、あたし一人が中途編入とかもう、ハブですよハブ。――それに、あたしが他の人と遊んでたら、いっくんマジでボッチでしょ？」

貴方が可哀想だからこうしているのだと、紗那沙は無駄に偉そうにのたまった。

郁斗は鼻で笑い飛ばす。

「その言葉そっくり返してやろうか、淫乱ピンクさんよ。お前、僕が居なくなったら授業にもついていけなくなるし、ドロップアウト組み確定だぞ？」

「へ、へんだ！ 良いんだもん学校のベンキョーとかわからなかったって、テストの点数一桁だって！ ホラ、一芸に特化して他方がゲージュツ家っぽいし！」

「じゃあ芸術家らしく一人で孤高に夏の海にでも行って、挙句カップルに囲まれて寂しい思いしてこいよ。ドラマのロケみたいだとか、指差して笑うから」

「ドラマのロケだと砂浜じゃなくて崖の上だよ!？」

「僕、後ろから押す役な」

「しかもアバンかラストの回想シーンだけで出番終わりっぽい!」
酷い扱いだと、紗那沙は泣き喚く。

郁斗は笑って頭を撫でるだけで、軽くスルーした。

出会ってから一週間、実にわかりやすい二人の力関係の縮図がそこにあった。

「まあでも、崖の上に上るかどうかは兎も角、水場に行ってみるってのはいいアイデアかもなあ」

「なんで？」

「――疲れてるから、ってことにでも、しておいてくれ」

この街に着てから、波の音を聞かなかった日は無いからだ、内心で本音を漏らす。

――ざあああん。ざあああん。

見える。そして聞こえる。

ここについて、前世の記憶まであるのだなどと言い出したら、この少女は果たしてどんな反応をするのやら。

わが身の異常性に、郁斗は改めておかしみをおぼえるのだった。

前の人生の記憶。

それを維持したままの、今の人生。

そして、その間。^{あいだ}

――そこでキミに、一つ提案がある。

「あ、有澤先輩だ」

「……っ」

紗那沙の言葉に思考を払う。

「お嬢様？ ……どこ」

「あそこ、渡り廊下。……と言うかいっくん、お嬢様とか呼んでるんだ」

「昔からね。ま、居候は辛いつてことだよ……ああ、^{あまがせ}天瀬さんも一緒なのか」

高等部校舎と各種専門設備が揃っている中央塔とを結ぶ渡り廊下を進むミラノと由宇の姿が、確かに郁斗たちの居る位置から見上げることが出来た。

両サイドで纏めた長い黒髪が夕日に映えるその姿は常の通り毅然とした佇まいをしている。

背後を付き従う由宇の姿は、まるでミラノの影に溶け込んでいるかのような自然なものだった。

――二人の顔はそのどちらもが、何処か厳しい表を示しているように見えたのは、気のせいだろうか？

「学生会のお仕事かな？ 凄いよねえ、高等部二年生なのに学生会会長だなんて。トップですよトップ」

「理事長の娘だしなあ、あの人。将来はそのまま、学園の経営に入るんじゃないの？」

「うわあ、エリートオブエリートって感じだね。なんて恵まれた人生！」

「人生恵まれてるお陰で、掛かってくる責任も大変なんだろうけど……これだけ規模の大きな学園だと、学生会に掛かる負担だって、ハンパ無いでしょ」

「わあ、リアルお嬢様マジパネエ」

「キミの家、確かお金持ちじゃなかった」

紗那沙の馬鹿っぽい言葉に、お前も一応お嬢様だと郁斗は呆れ声を出す。

「んー、ホラ、ウチは実家とは違ってフツーのお家だから。だから従姉妹のお姉ちゃんと違って、あたしは特待生入学な訳だし」

「そーいや、そんな設定だったっけ」

「設定？ 設定って何？ あたしホントに特待生だよ！ 一学年に五人と居ない！」

「……あ、五人も居るんだ」

「……というか、五人しか居ないって言うか。だから、中等部の入学式って無いんじゃないかにゃ」

「そうか、特待生だけで中等部の編入組みは全部か。僕を入れても

六人じゃあ、なあ……」

確かにそれだけ少なければ、わざわざそのためだけに式を行うなどと言うのもあほらしい話だ。

他の初等部から繰り上がりの生徒たちとあわせて、始業式に一律化してしまうのも当然かもしれない。

学則の説明なども、そういえば全部個人的に行われた。

「あ、でも五人でも随分多いらしいよ？ 上の学年は一人二人居れば良いほうらしいし……って、そういえば」

頬に指を当てて、ふと思いついたように紗那沙は言う。

「特待生の人って皆、色つきなんだよね」

黄色とか小豆色とか緑とか。

紗那沙はそんなことを言った。

「学園の施設の使用の件で特待生全員が集まることがあったんだけどさ、うん。あたしも含めてホントにカラフルだった」

「……そうなんだ」

郁斗は曖昧に頷く。

何か意味がありそうな気もしたが、色つき——つまり、髪の毛の色が常識から外れている人間と言うのは、窓の向こうを見下ろしてみれば幾らでも居るのだし。

だから、そういう偶然があっても、驚くべきではない。

「この学園って、色つきの人多いよねー。さっき言ったあたしのお姉ちゃんも桜色してるし」

「遺伝なのか、淫乱ピンクは」

「桜色！ ハートフルでファンシーな桜色だから！」

「ウチは両親ともに黒髪だったけどなあ。小学校のころに見かけた同年の色つきとかも、授業参観に出てた母親の方は普通の髪の色だった気がするし……ああでも、父親のほうが……いや、でも僕が」

淫乱違うと言う紗那沙の声も聞こえない風に、郁斗は思考に没頭

する。

中学に入ってから初めて出会った、自分と同じ視界を有する少女の言葉。

何か意味が含まれているような気がするし、或いは、ただの偶然に過ぎないかもしれない。

「そういえば、有澤先輩の髪も綺麗な青色してたよね」

——ざああん。ざああああん。



五話（後書き）

そろそろ、そろそろって感じか。

いえ、少し展開の練り直しが発生しそうなので仕事が忙しかったら明日の更新止まるかもしれませんけど。

原作ってガイドラインがなくなると、やっぱり書くのに手間が増えるねー。

結構前準備しておいたつもりで、もう後から後から問題が出てくるっつーか。

六話



「郁斗……紗々崎の小娘などと、また！ あんなに素直だった郁斗が、このままでは紗々崎ささきに毒されて——もう、これもそれも、お母様が積極外交路線に切り替えなど図るから！ 航路に海賊が蔓延するだけならまだしも、学園にまで有象無象の輩が押し寄せてきますし！」

全身から苛立たしさを隠そうともせず、ミラノは吐き捨てる。

背後に付き従う由宇としては返事に困るところで、苦笑気味に頬を緩める以外他になかった。

「大体、お母様は何時も何時も勝手気ままに！ ええ、ええ！ 口で指図しているだけで利益が生まれるのですから、お母様なら笑いが止まらないでしょう！ ですが、その裏で私がどれだけ苦労しているか！ 現場に出張っている娘の気持ちにも、少しはなってみなさい！」

ミイナ——有澤の頭首は常に娘のことを考えている、などと伝えたところで逆効果だろう。

往々にして、大きな変化を起こそうとすればそれに伴う軋轢、問題が発生するものだ。

物理的な意味でも精神的な意味でも、ミラノはその苦労を一身に背負う立場だった。

しかも彼女は開明的な思想を有するミイナとは違い、頑迷で保守的な思想を有する先代頭首の薫陶を受けて育った少女だったから、その主義嗜好も推して知るべし、である。

母親との意見の対立も、当然と言えた。

「まさかお母様。郁斗を〈起業〉^{カンパニー}への手土産にして、何かの取引を……ええい、紗々崎の頭首^{ササキ}ともあろうものが、拝金主義の奴腹どもにへこへこと頭を下げるなど、なんて情けない！」

「……お嬢様、それ以上は流石に」

家に仕える人間として、由宇も言い添えねばならなかった。

ミラノはただ頭を振って、振り返ることなく応じる。

「解っています。ええ、ただの愚痴です」

「お気持ちはお察しますが……」

「察する必要などありませんよ。むしろ何を弱音などと叱咤されてしかるべき言葉でした」

自らを戒める言葉を口にしながら、ミラノは平静を取り戻したらしい。

毅然とした常どおりの態度で、従者に向かって尋ねた。

「——それで、不審船の様子は？ 先日破壊したばかりの最近はずいぶん見慣れた船が、海魔に襲われているなどのたまっているようですが」

「はい。黒く塗装された船体、三軸水平三輪の魔導輪^{ホイール}、そして深緑の魔力光とありますから外観的にどう見ても〈黒羊の草籠〉^{ブラックシープ・バスケット}号としか考えられません。そして、その船が救難信号を発しながら領海内に進入。船の背後にインビシブル級海魔十七、ノーチラス級海魔一が確認されました。現在は了解外縁の潮流に乗って回遊中です」

「また〈黒羊の草籠〉^{ブラックシープ・バスケット}号ですか……何世になりますかね、これで。いえ、それよりもノーチラス級？ 深海に存在する超大型海魔が、領海内に？」

「はい。通常航路に紛れ込んだインビシブル級に追いかけてられ助けを求めている、というのであればまだ納得できるのですが、ノーチラス級に追いかけて……と言うか、ノーチラス級がこんな水位の低い場所にまで追いかけてくるというのは、流石に……」

「それ以前に、黒羊の海賊船が助けを求めているという時点でこち

らを馬鹿にした話でしょう。あの三馬鹿、私を誘っているつもりですか……それより、〈ブラックシップ・バスケット黒羊の草籠〉号を領海内まで追いかけてきておいて、今は回遊……ですか？」

行動の意味が解らないと首をひねるミラノ。由宇も背後で、難しい顔をしていた。

「はい。領海内に進入するまでは、確かに〈ブラックシップ・バスケット黒羊の草籠〉号を食い殺さんばかりの勢いで追いかけていたようなのですが、領海を越えた瞬間、突然……」

「えもの羊を無視して狼が散歩に出かけました、ですか。——ともかく、馬鹿にしろ海魔にしろ、港湾施設内部に侵入されたらことです。防護隔壁の展開を急ぐように。最大出力です」

「かしこまりました」

打てば響く従者の言葉に、ミラノは宜しいと満足げに頷く。

「ところで、あの……紗々崎様ささきが先ほどから、出港許可を求めてきていらっしやいますが。航路確保のための海魔迎撃作戦に協力申し上げたいとの、こと……です」

しかし、ついで放たれた由宇の言葉に、ミラノの返事は一瞬送れた。

間抜けな空気が、少しの間二人の間を流れる。

無言のまま黙々と歩を進める二人——よく見れば、ミラノの肩が次第に大きく震えだしていた。

爆発五秒前——などと、由宇が主の背中を見ながら考えていた、矢先。

「あのハッピートリガー、どうせノーチラス級を相手に自分の新型の性能を試したいだけでしょう！ 領海内で広域殲滅魔法を発動するようなお馬鹿に、誰が助けを求めるものですか！ 黙って犬の世話でもしてらっしゃいと私の署名入りで伝えておきなさい！」

「……かしこまりました」

一息で言い切った主の言葉を、頬を引きつらせながらも有は忠実に実行した。

一言の是非も述べない、全くもって出来た従者である。

ミラノはそれ以上その件には触れず、ため息混じりに少し話を戻した。

「小銭稼ぎが目的の、……本_{ほん}当_{どう}にただの海賊であってくれたなら、どれだけ楽か……ブラックシープ・バスケット〈黒羊の草籠〉号はまだ領海内をうろついているのですね？」

「はい、外界との境界付近を——現状、逃亡の気配は見られませんが」

「何か意味があるのか……まあ、アレはアレで、私に用事があると言うこともあるのでしょうけど」

「……いい加減、付き合っても長いですからね」

「良い迷惑ですよ、全く……」

苦笑気味の由宇に、ミラノは心底疲れた態度で息を吐く。

昔から領海付近で暴れているチンピラが喧嘩を売りに来た——それだけなら、本_{ほん}当_{どう}にどれだけ楽な話なのか。

ブラックシープ・バスケット〈黒羊の草籠〉号、それ自体は確かにただのチンピラ——野良魔法使いに過ぎないのだが、如何せん野良にしておくには惜しい腕があると言うのも事実で、色々と思巧みを考える輩からすれば、便利に仕える手ごまになりうる存在だと言えた。

そして現在、有澤の領地は悪巧みを企む様な不逞の輩にとっては垂涎の的のような環境になっているのだ。

元々有澤の領地は、幾つもの大きな海流が重なり合う、あらゆる勢力から見えて戦略的な要所だった。

新興の——これから勢力を拡張したいと望む複数の勢力から見て、確保しておきたい重要航路が絡み合っているような場所に有澤は存在しているのである。

先代領主の代では鎖国方針によって外交的に新たな時代の流れから取り残されつつあったのだが、しかし現在の領主に代替わりするに至り、積極的な外交方針に打って出た。

それは、新たに自ら勢力拡張に打って出るには遅すぎるタイミン
グと言えたが――しかし、有沢家当代当主有澤ミイナは、薄氷の
上を行く外交交渉を繰り広げて、自らの領地の一定の安定を手に入
れることに成功したのだ。

やっていることとしては、実にシンプルな話である。

大国に挟まれた弱小国家であれば、大なり小なり、必要とも言え
るやり方であろう。

つまり、跳ね除け続けて磨り潰されてしまうくらいなら、取り込
んで勢力均衡状態を作り上げてしまえば良い、という話で。

複数の外部勢力を同時に領海内に招きいれて、それらに有沢の領
地内での不戦協定を締結させ、半中立地帯とも言うべき状況を作り
上げたのである。

これならば、ある程度の平穏は、見込まれる。

だが勢力間の対立関係が解消した訳ではないから、やはりどうし
ても火種はくすぶり続けてしまう野も当然といえた。

弱小勢力である有澤の望みのまま、敵を目の前に剣すら拔けない
というまだるっこしい状況に、苛立つ者達も多いだろう。

であれば、苛立ちの矛先が有澤に向くのも、当然。

「音紋の照会結果から、コミュニケーション〈教導体〉製のP・A・W型シール・ドライブ呪唱機関をカ
スタマイズして使用していると推測されます。となると背後に居る
のは……」

「カンパニー〈起業〉所属の射撃馬鹿が迎撃したいと言ってきているんですか
ら、そういう事なのでしょうね。だとすると小銭稼ぎが目的の海賊
どもはさておき、スポンサーの目的が気になりますが……。教会と
組んで我が港の破壊がお望みなのか、それとも開発中の新魔法のテ
ストがしたいというだけか、或いは両方、或いは……」

——ふう、とミラノは息を一つ吐く。

思い当たる事情が、今の有澤の領地には存在していたのである。

郁斗。

銀色の髪の少年。

魔法使いとしての道を歩んでいる者達からすれば、その特異性は際立った者に違いなく——。

「あの子自身が悪い訳ではない……」

郁斗本人はただ、優しげで賢い、将来性に溢れた少年だと言うだけ。

ただその輝きに魅せられて、よからぬ輩どもが羽虫のごとく纏わりついてくる事実が問題なのだ。

そう、郁斗自身には何も問題は無い。

ミラノにとって彼の少年は、弟のように大切な子に違いないのだから。

「だから、私が守りましょう」

円筒形のビルディングの中心を貫くエレベーターの正面、円筒形に広く作られたホール。

その中心で、ミラノは、由宇は立ち止まる。

高等部校舎と渡り廊下で結ばれた、中央塔四階のエレベーターホールは、何故か不思議なほどに人の気配が無かった。

そこに、淡く、青い光が立ち上る。

ミラノを中心に、ミラノが動かす、指の軌跡に合わせて——彼女の長い髪と、まったく同様の美しい青色が。

コン・シイル
「開封」

ささやく声、或いは、詠うような声で、起動式キークードを唱える。

青い光の軌跡が文字を描きだし、それはやがて、ひとりでに形を変えて何かより、複雑な形状を描いていく。

円周の内側に、幾何学的なパターンを躍らせて、ミラノの指先から、それはやがてホールの石畳を埋め尽くす、青い光り輝く魔方陣へと完成した。

「私は、有澤の後継」

足元から立ち上る青い光の中を、ミラノは踏み出す。

ホールの正面に備えられたガラス張りの展望エレベーターへと。

彼女の歩みにしたがってか、エレベーターの扉が、ひとりでに開いていく。

何の変哲も無い筈の——しかし、感じる事が出来る者が居たならば、その先から香る潮の香りに気づかない筈が無いだろう。

ミラノは毅然とした眼で、付き従う由宇と共にエレベーターの内部に踏み込んだ。

「私は、私の領地と領民を——守る」

踏み込んだ先、上昇していく展望エレベーターのガラスの向こうに見える景色を、しっかりと見据えて。

そこに広がる光景は。



——ざああん。ざああああん。

「もう一度確認するぞ？」

「あの、いっくん？ 目が怖いかにゃあって」

カフェテリアの隅、太い柱に手を置いて——そこに背を預ける紗那沙に向かつて。

今からいったい何を始めるんだという姿勢で、郁斗は紗那沙にたずねる。

「さなちゃんにはお嬢様の髪の色が青に見える」

「紗那沙には有沢先輩の髪の色が青に見えます」

「僕にはお嬢様の髪の色は黒にしか見えない」

「郁斗君は有澤先輩の髪の色を黒だと思ってる」

そこでいったん、会話が止まった。

互い、初めて出会う同様の視界の持ち主——だった、筈なのに。今ここに、明確な認識のズレが現れた。

——ざああん。ざああああん。

潮騒の音が、響く。一際大きく。

——しかしこれも、聞こえるのは片方だけ。

互いに異常な視界を共有していながら、同時に共有できない異常を、それぞれが有している——それだけのことなのか。それとも

「……訳が解らない」

郁斗にとってミラノは親しい人間で、幼いころから見知った関係だった。

その彼女が、郁斗では気づけない怪異を抱えていたと言うのであれば——あれば。

「あったとして、いや、そもそもこの髪の色ってなんなんだろうね」
紗那沙から身を離して、額にかかる銀髪を掻き揚げる。

窓に映った自分を見る必要すらなく、視界に入る光の色は銀色だ。

「そんなのあたしに解るわけないじゃんよお」

柱に押し付けられて怖かったらしい。紗那沙は少し涙目となっていた。桃色の髪を力無さ気に揺する。

「見間違いつて訳でも無いんだよね？」

「確認されると、ちよつと不安になるけど……多分。うん、だって始業式で挨拶してたときも、ちゃんと青く見えてたし」

青く見えるのは、紗那沙だけなのだ。

先ほどまで同じように見えていたはずの郁斗にまで疑いの目を向けられれば、流石に不安を覚えるのも当然だろう。

しょんぼりとした態度に、郁斗も流石に罪悪感を覚えて、

「……確認して、みるか？」

——ざああん。ざああああん。

波の音が、近い。

とてもとても、近い。



へ私に登録されている転移呪式を利用して、キミを直接現世へと転移させる。ああ、無論可能な限り新生する肉体に近い位置に転移させるから……いや、理論上これでいけるはずだ。魂だけの不安定な状態のキミを現世へと上げれば、必然と安定を求めて出来上がったばかりの器に飛び込む筈だから。大丈夫だ、問題ない

凄くどう考えてもとてもアバウトであり、平気と繰り返されればうかつに信用できる筈も無かった。

——もつとも、こいつの考えに頼る以外に僕に出来ることは無いのだから、信用してやるしかないのだけど。

へ安心したまえ。シオの潮流を利用した高速転移呪式は帝国ではポピュラーなもので、今の私でも発動に失敗するはずも無い。キミが認識している現世の情景で補足を加えれば、何も問題も無く現世へと転移——いや、転生できるはずだへ

だから、中途半端に『筈』とか加えないでほしいものなのだが。人間ではないものに人間のセンチメンタルなメンタリティを期待するのが間違いかもしれないが。

へむ。その発言は少し差別的な感じがするね。私はそれでも、私の御者たる人間を最大限補助するために作り上げられた、この世に数少ない人工の精霊、かそうせいれい仮想精霊と言う貴重で希少な存在なのだよ」

自慢気だ。得意気ですらあった。案外お調子者なのかもしれない。自慢するほど貴重な存在なら、たまたま通りかかった他人様の力になんて頼るんじゃないよとか、いろいろと突っ込みたいところも出てくるけど。

へ言っただろ？ 私は人を補助するために作られた存在なんだ。補助すべき人の頼みがなければ、私は一人では何もすることが出来ないへ

だからこそ、この海の底に。

本人の弁を信じるのなら、推定三千年以上の長い時間、光のひとつも届かぬこの場所に居たらしいのだ、こいつは。

三千年前に作られた——所謂、人工知能。

僕の長年の研究テーマとも合致する、なかなかに興味深い存在な

のだけど……それが真実かどうか確認するのは、追々、ゆっくりとすれば良い。

今は。

へうん。だからね、私は人の命令がなければ動くことは出来ない。
人の頼みが無ければ、力を使うことすらままならない——だから、だからだ

ここから、出たい。

それがこの大きな存在の望み。

へキミの魂^{ウィル}に私の召喚式を刻み込む。魂の奥深く、転生しても決して消えないように。キミは現世へと戻ったら、その式を発動して——私を、呼んで欲しい

そうすれば再び、波を裂き、大海を奔ることが可能となるから。
呼んで欲しい、それはそう望んだ。

僕はそれに承諾しようとして——そういえば。

——ざああん。ざああああん。

僕は、お前の名前が思い出せない。



六話（後書き）

！？（。D。）

……みたいになっててくれたら助かるけど、どんなもんでしょうね。

七話



——ざあああん。ざあああん。

おかしい。

そんなことは、カフェテリアを出て中央塔内部に踏み込んだ時から気づいていた。

「人の気配が……」

「放課後だからな」

「カフェテリアには一杯いたよね？」

「そりゃ、カフェテリアだからな」

おびえた声と共に腕にしがみついてくる紗那沙に適当に返しながら、郁斗自身も冷や汗が止まなかった。

エントランスホールを抜け、最奥にある、エレベーターの前まで。三フロア吹き抜けになった広々とした空間なのだが——人の気配が、まるで感じられないのだ。

気配が感じられない以前に、そもそも、人の姿が見えない。

中央塔は、郁斗も日ごろから利用している大図書館を始めとした、専門的な各種施設を集合させた多目的校舎である。

本来、放課後ともなれば自主学習、或いは自由研究などを行う生徒で賑わっているであろう筈のその場所が——しかし今この時に限り、まるで人の気配がない。

円筒形のエレベーターホールが、今はまるっきり無人、無音の空間と成り果てていた。

引き返すべきか。

いや、引き返すべきだろう。

後ろ足を返そうとして——しかし。

——ざあああん。ざああああん……。

波の音がやけに近くて、それこそここを出て直ぐ外から鳴り響いているようにすら思えてしまい、振り返ることも空恐ろしかった。

ゆえに結局、引き返すことも出来ず、郁斗はエレベーターの上昇ボタンを押しながら、紗那沙に話題を振る。。

「お嬢様が居ると居たら、学生会の施設が密集している、最上階だよな？」

「多分そうだと思うけど……ねえ、ホントに行くの？」

明らかに危険な気配がすると、紗那沙は及び腰である。

「さなちゃんの気持ちは解るけどさ……でもほら、一応行くだけ行って、何も無いってちゃんと納得しておかないと、後味悪くなりそうじゃないか？」

「うう、でもなんか、上に上がったら上がったで、藪とか蛇とかそんな感じがヒシヒシと……」

「とはいえ、もうエレベーター着ちゃったから、な」

空気の抜けるような音が、硬い扉の向こうで鳴る。

二人の前で、上層階から下ってきた屋上直通の展望エレベーターの扉が、開く。

ゆっくりと。

ガラス張りのエレベーターから見える学園、その向こうの城乃下きのしたの街並みの風景は絶景だと評判だ。

直通行ける、煉瓦敷きの屋上の展望広場は、今日のこの美しい

夕焼け空を思えば、賑わっているに違いなかった。
違いなかった、だろう。

——ガラス窓の向こうに、夕焼けに染まる学園が、ちゃんと広がっていたのなら。

「……」

「……」

言葉も無い。

入り口の前で立ち尽くす二人の前で、再びエレベーターの扉が閉じられていく。

ゆっくりと。何事も無かったかのように機械的に。

無常にも、当然のごとく、自動式の開閉扉は、閉鎖された。

そして、しばしの間をおいてから、漸く。

「……ねえ、いっくん」

「——言うな」

互い、顔を見ないまま確認の言葉を——しかし郁斗は、一言で切り捨てる。

紗那沙は何度も何度も自動ドアと郁斗の顔との間を視線を往復させながら、慌てた声で言い募る。

「え、で、でも！ でもホラ、今、ガラスの向こう、ガラスの、向こう……っ」

「気のせいってことにしておけっの！」

怒鳴った。

出会ってから今日まで、紗那沙が見たことが無いような、焦りを帯びた顔。声音。

文字通り取り乱しているに違い無い態度で、紗那沙が二の句を告げる前に、言葉を重ねる。

「僕たちは若いから階段を使って最上階まで上がる。健康を考えたからエレベーターは使わない！ 以上！ 行くぞ、駆け足！」

紗那沙の言葉を強引に遮って、郁斗はホールを出て直ぐのところにある内階段へと向かう。

「にゃああ、ちょ、まってよいっくん！ 一人にしないでえ！」

慌てて、紗那沙もそれに続く。郁斗の身体に、しがみつく勢いで。

二人は、静寂に包まれたエレベーターホールを後にした。

そこは、見てくれだけは何時もどおりの、確かに何時もどおりに違いない、空間。

人の気配が感じられないだけ。たまたま、偶然。

——だから。

例えば、ガラス窓の向こうに、海に沈んだ学園が広がっていたのなら、それは見間違いでしかない。



「はあゝい、ミイナでえゝす」

受話器を取るミイナ。

学園の理事長室の椅子に座り、しかし格好は何時もどおりの喪服姿だった。

顔も、笑顔のまま。やはり何時もどおりである。

『インベリアル・ガード
皇帝警護騎士団、村上です』

「あら綺羅々ちゃん、お元気い？」

電話越しに響く女性の顔を思い浮かべながら、まだ、ミイナの顔は、声は穏やかなまま。

理事長室の中は、のんびりとした空気に満ちていた。

『緊急の報告があります。実は——……』

用件が、耳に届く。

「……そう。解りました。……ええ、ええ。座標自体は……でしようね。——つまりこちら側に……そう。それじゃあ貴女達はそのまま周囲を搜索しているフリでもしてて頂戴。後はこちらで処理します。——ええ、それじゃ」

幾度か頷きながらそれを聞き届けて、ミイナは、笑顔のまま指示を下した。懲罰など、下すはずも無い。

受話器を置く。

立ち上がり、カーテンを下ろした窓の傍まで歩み寄る。

「……紗那沙ちゃんは……郁斗君も、そうね。目と、耳……考えられない話ではないけど、踏み越えるには、まだ少し弱いかしら」

窓の前で立ち止まり、つぶやく。思考を纏めるために。

予想外の事態。

同時に、予定していた事態。

「幾らなんでも早すぎるわ。見えてはいるのは知っていたけど……やはり銀、と言うことなのかしら？ それとも彼方ちゃん^{あなた}辺りが必要ない知恵でも……無いわね。あの子はあれで、自分の居場所を取られるのを恐れている節があるもの。〈教導体〉^{コミュニティ}が……何かするなら、普通に向こうで人攫い^{カンパニー}でしようし。紗那沙ちゃんを傍においてあるんだから、学園内で起業を刺激するような迂闊な真似をするとも思えないけど……黒崎さん、限度ってものをご存じない方ですものねえ」

推論は幾つも立つ。

「港灣施設内であれば、最悪私が……しかしノーチラス級……ミラノちゃんだけで大丈夫かしら？ ああ、だからノーチラス級か。最悪、私がね。最悪の状況を……やはり〈教導体〉^{コミュニティ}の？ それとも偶然がいくつか重なって……駄目ね。何か決定打に欠けるわ」

だがどれも決定的なものとは遠い気がして。

「いずれにせよ、踏み込んでしまった以上は、もう戻れないわね」

——戻す気なんて、はじめから無いのだけど。

愛しげにすら思える口調で、吐息とともに吐き出した。
誰かに向けて。

恋文を綴る乙女のような憂いた顔で。

そんな自分に、笑う。

気分を切り替えたかったのか。

ミイナはおもむろにカーテンを開く。

電灯の明かりを背に受けて、窓ガラスに反射するミイナの顔は、
表情は果たして。

——窓の向こうに広がっている、光差さぬ風景は、果たして。



「見失った？　——はあゝゝゝ、ただのデート中の中学生を、貴方たちが学校の中で、見失った。はあゝゝゝそれはそれは」

何処か。

高級な調度品が並べられた——並べられているだけで調和の取れていない、一言で言えば『下品』な空間。

男が奇妙な形に眉を歪めていた。

携帯電話を耳に当てている。

「はい……はい、ははは、そうですか。港の中に。それでは追いかけるのを躊躇うのも仕方ないでしょうね……ええ。丁度仕掛けが届いて……ああ、届きましたか？ ええ、じゃあ魔女閣下もお詰めになられていらっしゃる状況でしょうし。——ええ、ええ、ええ、ええ」

興味深そうに、時には笑みすら浮かべて電話越しの焦りの混じった言葉を聴く中年に差し掛かりつつある男。

痩せて枯れているように見えて、目だけは爛々と異様なまでの力を有していた。

「なるほど、理解しました。それでは貴方達はそのままそこでティータイムと洒落込みなさい。決して港の内部に踏み込もうなんて考えないことですよ。あの内部は魔女の領域、言ってみれば魔境とか魔窟の類ですから。踏み込んだが最後、到底五体満足では帰れません。努々、私に無駄な仕事を増やさせないように……また魔女閣下に厭味を言われるのも、御免ですからね。ええ……では」

言い切って、相手の返事も待たずに通話を終わらせる。

電話を切って、そのままの姿勢で——男は一つ、舌で唇を舐めた。

「見失った……いえ、現実から消失した、ですか。海域に招かれたとすれば、魔女が手を下したと言うことか……、こちらの動きを察していた？ いやしかし、危険なのはむしろ海域の方だと考える筈だが……読まれたのか、やはり。些か強引に事を進めすぎたと言うことですか。やれやれ、やはり一筋縄ではいきませんね、魔女の釜の中から純銀を取り除こうなどと言う、大それた挑戦は」

やれやれと、自身を嘲笑っているような態度。
享樂的で墮落した——だが、それと同時に。

「しかし、紗々崎ささきの娘も一緒というのはどう言う事だ？ 次女の方は見習いで……すらない素人の筈。——偽られたか？ 当然、可能性はあるが……いやむしろ、素人だからこそ……そうとも、皇帝陛下もまた素人なのだから、才ばかり先走った二人が噛み合えば……クク、面白い。場末の海賊などに任せずに、私が自ら行けば良かったかも知れませんね」

さもおかしそうに笑う。

確かな理知の輝きを瞳に宿らせて。

男はひとしきり、自らの想像に肩を震わせて笑った後で、さて、と不気味なほど唐突に表情を冷徹なものに変える。

「仕掛けは有効利用してくださいよ、羊の皆さん。——尤も、貴方達が生き残るためには、有効に使うしか無いのですがねえ」

自らが仕掛けた結末を——少し予想外の方向へと走る予感に歓喜しながら、言う。

侮蔑の表情を隠そうともせず。悪意に満ちた顔で。



七話（後書き）

今回短いすかね。

まあ、次回が多分長いんですけど。

シーンの切り替えが長かったり短かったり、安定しないなあ……

八話



シオの海域と言うものは存在する。

現実と共存する形で。寄り添うように、直ぐ、そこに——しかし、届きにくい位置に。

そこは視覚化してしまえば、全てが海の底に沈んでしまった世界だった。

人々が営みを送る町並みも、山野も、河川も——海も、そして空も。

シオの海域は、海に閉ざされた世界だった。

シオの海を構成するもの。

それが〈シオ〉。生命の源。根源の形。精神。心。或いは、情報、概念それ自体それそのもの、とも。

現実世界にも極僅かに漏れ出すそれは、人の思考に反応し、現実を改ざんする力と成る。

即ち物質界の理を超越した——そう、幻想に揺られるが如き魔法的な力を、発揮するのだ。

シオを用いて超常現象——〈魔法〉を発生させる者達。

彼らを、〈魔法使い〉と呼ぶ。

現実には漏れ出した僅かなシオを活用して魔法を発生させていた魔

法使い達が、シオで満たされた世界——シオの海域を目指すのは、当然のことであつた。

現実の真後ろに存在するシオの海域。そこであれば、卑金属を金に変えるが如き奇跡すら容易に成しえるに違いないと、現実の世界を望むがままに作り変えることすら容易いはずだと。

魔法使い達は、次々とシオの海域に乗り出していった。

——海に乗り出すのであれば。

それに相応しい乗り物を、用意するべきだろう。

水晶をはめ込んだ櫂の杖だろうか？ それとも、空を飛ぶための箒？

いや、違う。

海を征くべき乗り物、それは、当然、船であるべきだ。

魔法使い達は、海の中でも沈まない、あらゆる危険を撃ち払う——そして、あらゆる者達の先を行く、そのための大きな船を、自らの魔法を駆使し造り上げた。

魔法の源で満たされた海底を進む、魔法使いの大きな船。

厚みのある円盤状の輪の内側に船体を浮かべた、不思議な形をした船だつた。

魔法力によってシオに干渉し深海の中で潮流に乗る浮力を得る輪
ホイル 魔法導輪。

そして荒れ狂う深海の潮流を切り裂いて進む、魔法使いの魔法力
シール・ドライブ を動力に変える呪唱機関。

迫りくる敵を撃ち払うための攻性魔陣式を放つための砲紋を備え、
ほうもん 深い海の底で身を守るための防御呪唱を可能とする。

リフティング・ホイール
導輪駆動船と、それを呼んだ。



きのした
城乃下市。

現実空間においては取り立てて話題に上がることもないと言う程度の地方都市に過ぎないが、ひとたびシオの海域に目を移せば、そこに広がる巨大な貿易港に驚きを覚えるだろう。

この街は、有澤という歴史ある魔法使いの一族が領有する、へ魔法使いの領地」なのだ。

現実と同様の都市がそのまま海底に沈んだが如き光景が広がる有澤の領海は、現実空間の同一座標上に存在する都市構造物、道路、ライフライン生活配管そのものを魔法呪式——巨大な複合魔陣式と成し、領域内のシオの潮流を完全に制御していた。

シオの海域と現実——物質空間は相互に干渉を与え合って存在していたから、現実空間で都市を建造すればそれがシオの相互緩衝作用によって、大まかな都市景観がシオの海域内でも再現される。

つまり、現実で魔法定理に添った形で都市を形成すれば、それがそのままシオの海域では魔法——魔陣式として活用することができるのだ。

一つ所にとどまらないシオの潮流の中で苦勞して陣を敷き領海を築き上げるよりも、よほど効率よく領海を築くことができるのである。

現実空間においてここまで魔法的な建築計画を実行できる魔法使いは、そうはいない。

有澤は長い年月をかけて、忍耐強く忘れ去られた山村を自らが望む魔法都市へと開発していったのだ。

それゆえに、僅か一家一門の弱小勢力に過ぎないにも関わらず、現代魔法界有数の大勢力たちに一目置かれるような存在へと成りおこせたのである。

四方を山に囲まれた閉塞的な立地にもかかわらず、ありえないほどに発展している地方都市へ城乃下^{きのした}市——その正体は、有澤家によって長い期間をかけて気づかれてきた魔法使いの城を守る城下町だったのだ。

そして、その城下町の中央——尤も潮流が安定している地点に、それは存在した。

有澤港。

現実空間から物資を運搬するための大規模接続門、そして貨物輸送の効率化には欠かせない物体^{マテリアル}／^{アストラル}霊体変換装置を備えた導輪駆動船^{リフティング・ホイール}のための港湾施設である。

港は中央管制塔を中心に、円形の敷地を大きく四つに区切られる形となっていた。

四つの区画のうち、半分は民生用の貿易港。もう半分は軍事施設として運用されてる。

概観はそのまま現実空間同一座標上に存在する澤乃城学園の敷地^{リフティング・ホイール}を複写したもので、巨大な学園ない施設がそのまま導輪駆動船の港として使用されていると言う——つまりは、学園のそこかしこに、当然のように導輪駆動船が係留されている奇妙な光景を拝むことが出来る。

尤も、それは平時の時に限ってのみ、だが。

現在の有澤港は防衛体制が発令され、停泊中だった船舶は全て地下格納区画——無論、^{アストラル}霊体還元を施した上で、だが——に格納されているか、或いは現実へと移動されている。

表層の港湾施設自体も、既にそれを覆うように巨大な防護隔壁が

展開されていた。

城乃下市全域を含む有澤の領海内全てのシオの潮流を制御しているからこそ駆動出来る超大型魔導炉の生み出す強固な防御隔壁は、並みの攻性魔陣式では傷一つつけられないだろう。

無数の商船が行きかう一大寄港地は、今や強固な海底の要塞と化していた。

その必要もあろう。

結海内には今、招かれざる客が侵入してきていたのだから。

領海内には、外海から海魔が進入してきていた。

海魔。それは狂った魂の行き着く果ても、或いはシオの海域で自然発生したシオの海域でそうあるべき生命なのだとも言われていたが、詳しい事実にとどり着いた魔法使いは、未だ居ない。

しかし、事実としてはつきりしていることは、海魔は時に航路上へさ迷い出て、人を――人が乗る、リフティング・ホイール導輪駆動船を襲うと言うこと。

海魔はその大きさの大小によって幾つかの級に区分されているが、特にインビシブル級以上の中型海魔以上の存在は、商船レベルの魔法しか搭載していない導輪駆動船ならば絶対に出会いたくない相手である。

現在、有澤の領海内にはインビシブル級の海魔が侵入を果たしていた。

数も十七と、ひとつの群れ丸ごとが押し寄せてきている状況である。

迎撃には軍用攻性魔陣式アタック・コードを搭載した戦闘艦艇の出撃が必須な状況であろう。

特に今回の海魔の侵入は、インビシブル級だけにとどまらないのだから。

ぐおん、と。街に影を落としながら、それはゆっくりとした泳ぎをみせていた。

寸胴の太い腹があり、長い首の上に頭があり、そして巨大で平べったい鰭と尾がついている。

大きさは、駅前のビジネス街、立ち並ぶ高層ビル六棟で埋まっている一区画に余裕で覆いかぶさるほどの巨体だ。

ノーチラス級と言う。

水深二千マイル以上の深海域に生息している、港湾施設が建設されるような航路規定平面以下の浅い水域には絶対に出没するはずがない大型の海魔である。

しかし現実には、ノーチラス級は存在していた。

鯨並の大きさを持つインビシブル級を子分のごとく引き連れて、有澤の結海の内に入侵してきたのである。

——ところで当然だが、普通魔法使いの領地ともなれば、領地の安定性を考えて海魔除けの結海を張り巡らせている。

一々海魔に入侵されているのは迂闊に経済活動も行えないのだから、領地と名のつく海域であれば、必ずそのような広域結海が展開されていた。

物としては実に単純で、海魔が嫌う音（正確には物理的な音ではなく、魔法的概念情報だが）の波を結海内に発生させて海魔の領海内への侵入意欲を減退させる、と言う論法となる。

だが海魔は、いかなる理由か結海を抜けて有澤の領内に侵入してきてしまった。

そう、中型十七体、大型一体に——巨体だけで暴力な存在に、結海の内側へと入られてしまったのである。

こうなると、迂闊に結海を展開したままではいられない。

結海の発生させる音が海魔を不機嫌にさせ、そして領海内で暴れられでもしてしまえば、一大事だからだ。

故に、有澤は領海内への海魔の侵入が止まらないと判断するや、結海をすぐさま解除する。

海魔除けを解除してしまえば、そこは潮流の安定した穏やかな海

が残るばかりであり——既に停泊中の船舶（人員含む）の対比が終了している現状では、海魔の興味を引くものは領海内に存在せず、結果として、大型の海魔が呑気に領海内を回遊しているという、妙な形で安定した状況に陥ってしまっていた。

——そんな、市街地の上空の海を海魔が行きかうと言う貴重な光景の、片隅。

その光景を演出したものが、居た。

「いゝなゝあいつら、なゝんも考えていなさそうで」

「事実、何も考えてない……仕掛けに引っ張られてきただけだから」
有澤の領海外延部ギリギリ。澤乃城市を囲む山林の頂上一角で静止している海賊船〈黒羊の草籠〉号。
ブラックシップ・バスケット

その露天艦橋では、いかにもやる気の無い言葉が交わされていた。商用貿易港と軍事基地を兼ねる有澤の領海内部にまで侵入を果たした、勇気と無謀の溢れる海賊たちの態度とは、とても考えられないものである。

「アンタ達！ 折角有澤の城にまで乗り込んできたんだ、ちったあ気合入れな！」

唯一、その中で気合に満ちた存在があった。

操舵を兼任する船長席に仁王立ちする、深緑色の髪の女のものだ。歳の頃は二十歳を過ぎたかどうか、全体的にメリハリのある肢体を、今は露出度の高い黒の戦水衣せんすいで着飾っている。ビキニスタイルのトップスとボトムは布地の面積も限界ギリギリであり、膝丈まである外套を羽織っていないければはみ出た胸や尻肉が丸見えとなっていただろう。
ブラックシップ・バスケット

〈黒羊の草籠〉号一隻からなる〈黒羊海賊団〉船長、間那宮奈々まなみや なな美みその人である。

男勝りの性格そのままの活気溢れた顔立ちは、今はやる気の無い手下たちを叱咤する怒り顔へと変わっていた。

「そうは言いますけどね、姐さん。もうやることやったんだし、怪我しないウチにとっとと帰りたいって思うのが人情ってヤツでしょうや」

オレンジ色のぼさぼさの髪も派手な長身の男が、欠伸をかみ殺す。
山戸家弥一郎。やまとや やいちろう

工事現場辺りで深夜にリヤカーでも押していそうな格好をしているが、一応歴史と伝統のある魔法使いの家の出身の男である。因みに、実家は勘当中だった。

「依頼料分の働きはした。……というか、早く逃げないと依頼人の希望通りの捨て駒になる」

そして、観測席の弥一郎やいちろうの隣の席、詠唱管制席に陣取っている幼い少女が、リリーナ・リエッタ・リーデライト。菫色のロールがあった髪が、白い肌と合わさって幻想的な雰囲気を高めていた。

彼女は先天的な魔法の才能を理由に困窮する実家から密輸船に乗せられて売りに出されようとしていたところ、偶然その密輸船に対して海賊行為を行った奈々美達に拾われ、現在に至る。

大金を詰まれてあっさりと自身を手放した実家にも、まさか市場にも戻る訳にも行かず、今はこうして海賊の仲間として逞しく働いていた。

「捨て駒？ 何のことだい？」

「……気づいてない。この船長、本当に駄目だ……」

「姐さん、依頼料以外目が行って無かったからなあ。いつもの事だけど」

「いつもの事だけど駄目上司過ぎる……三日で転職を考えるレベル」
「今更俺らみたいなのはみ出しモンを拾ってくれるところなんてねーって。何処に行っても便利使いされるだけ。だったらもうあきらめて、真面目に海賊やろうぜ」

「真面目な人間は海賊なんてしない……。ましてや魔法なんて関与らない……」

舵輪の前で首をひねっている奈々美を横目に、二人はこそこそと

言葉を交わす。

直情型の船長と、やる気の無い部下二人。

概ね、ブラックシブ・バスケット〈黒羊の草籠〉号の何時ものあらゆる場所での光景と言えた。

有澤の領海内でも全くそれが変わらないと言うのは立派ともいえ
たが——同時に、実に無謀な話でもあった。

「……ま、逃げるにしてももう遅いやな」

「背中から撃たれるのは、マジ勘弁……」

やれやれと首を振る二人。

「はっは、ようやくお出ましいかい！」

一人だけ、奈々美一人だけが、実に楽しそうだった。

彼らの見ている先——港を守る防護隔壁の一角が、ケーキカ
ットでもされたかのように開かれた。

四半分の一角が霊体構築アストラルを変更し、現実空間では高等部施設とし
て活用される区域を、地表から消失させる。

ぽっかりと広がった空間に、球状立体魔陣式プロトグラム・スフィアが描き出され、そし
てそれは、急速に輝きを増し——光が失せた、次の瞬間。

華麗にして優美。高貴にして可憐。

翼を閉じた白鳥の如き慎ましやかな船体と、それを守るように浮
遊する、上下二輪の魔導輪ホイール。

船体色は青。海の色よりも深く、空の色よりも鮮やかな——青
色の導輪駆動船リフティング・ホイール。

唸り響かせる呪唱機関の音色は現代では再現不可能な旧時代高度
魔法文明の遺産——D・E・E・N式呪唱機関シール・ドライブのものに違いなく。

ならば、この海域、あの港の内側から出現した船が何者であるか
など、今更問うまでも無い。

ブルーローズ・セレナーデ
〈青薔薇の小夜曲〉号。

有澤の海を守る姫君の出陣だった。

八話（後書き）

また中途半端なところで切ることに……。

で、なんだかようやくと言うか唐突と言うか、出るもの出始めたので、テキトー過ぎてどうしようもなかったあらすじを書き直してみたり。

……それでもまだイマイチっぽい感じもするので、気が向いたらまた書き直すかも。

九話



「音紋照会！　〈青薔薇の小夜曲〉号と確認！　砲紋展開探知！――

――ってオイ！　港の防衛用の砲台も、こっち向いてるぞ！」

艦橋に緊張が走る。観測席の弥一郎の言葉に応じる形で、舵輪を握る奈々美が、叫ぶ。

「見りゃ解る！　機関最大、戦闘体制！　魔導輪に防壁魔陣式入伝！　ついでに全砲紋に、――イシュメルの凶刃〈アタック・コード2th〉、詠唱急がせ……」

「前半は了解。後半は無理。処理力オーバー。システムが焼きつく……」

詠唱管制席に座るリリーナが、船体外周を走る主《メイン》魔導輪に防壁の詠唱をさせながらも、実にやる気無さ気に艦長の言葉を退けた。

敵――有澤の戦闘艦艇が出港してきたと言うのに、実に淡々とした態度である。

「新型だよ！？　何のために砲紋八つもつけてるんだい！」

「そりゃ姐さん、止まって遠くから狙いつけて、順番に撃つためっすよ。戦闘機動中に防壁張りながら攻性魔陣式の多重詠唱とか、幾ら新型でも無理に決まってますって」

「おだまりデク！　有澤は出来てるじゃないか！」

「そりゃ、向こうはビンテージっすからね」

「旧時代に造られた導輪船は、マジチート……」

「だよなあ。リリの言うとおりだって。姐さん、マジで逃げましょうや。むざむざ〈教導体〉の企みに乗っかって撃沈されてやる必要

なんて無いっすよ」

「一応、依頼どおりに海魔の領海内への誘引だけは果たした。ここで逃げても、連絡を予定の時間通りに送ってこなかった向こうの過失で済ませられる問題。——この船でビンテージと殴り合いなんて、正気の沙汰じゃないよ……？」

やる気の無い言葉に違いないが、表情は二人とも真面目なものだった。

彼らをこの状況に追い込んだ人間の魂胆が、船長と違ってしっかりと理解できていたせいである。

開発した新魔法のテスト。

新魔法を用いて深海域より大型海魔を誘引し、有澤領内に侵入。海魔を領海内へと開放。

その後、連絡予定時刻まで領海内で待機、と言う内容の依頼である。

前金有り。成功報酬有り。

ついでに、破損中の船の修復まで面倒を見るというのだから、仕事の内容の厳しさと比しても美味しい依頼に違いないのだが——普通なら、あまりに美味しすぎる内容に、二の足を踏むべき場面である。

特に、現地で事後の指示を待て、などと曖昧な言葉で済まされていたなら。

「どーせアレだべ？ 『お疲れ様。キミたちの犠牲は無駄にしないよ』とか言いながら自爆スイッチを……ところでリリっち、そろそろ自爆呪式^{コード}解けた？」

「例のアレの側に転送中。……システム中枢に食いつかれてたから、ゆっくりとやらないと、気づかれる」

「機密漏洩の防止のためつつーても、エゲつねえよなあ、あの変態親父」

「所詮私たちは、十把一絡げの底辺者……領海内で呪唱機関を爆発させれば、あわよくば有澤の結界に大打撃も与えられる。ある意味、価値に見合った正しい扱い」

ひそひそと、あくまで船長には聞こえないように二人は緊張感のある言葉を交わす。

二人は世間のはみ出しものの自覚があった。そして、居場所を作ってくれた奈々美に感謝もしていたから、だから、彼女の身に降りかかりそうな火の粉は、自分たちが退けてみせると言う決意もあった。

「なんだか知らないけどコソコソくっちゃべってるんじゃないよ、アンタ達！ あたしらみたいな日陰者は、金が無いなら首が無いのと同じなんだ！ だったら多少怪しくっても波に乗るしか無いじゃないかい！」

「……ああ、姐さん。一応ヤバ気な仕事って自覚はあったんすね……」

弥一郎の漏らした本音に、奈々美は声を荒げる。

「あんた、あたしを何だと思ってるんだい！」

「そりゃあ、何時も素敵で美しい、俺たちの姐さんっすよ」

「え？ ……そ、そう？ 素敵だなんてデク、そんなあ……」

「……単純。だから騙されて借金ばかり嵩む……」

明らかなおべっかに、にへらと頬を緩ませる奈々美を、リリーナは白い目で見ていた。

「じゃ、借金のことは、爺に文句をいいな！」

腕は悪くない。

個人で武装船を所有している。

ブラックシープ・バスケット

だが悲しいかな、彼ら〈黒羊の草籠〉海賊団には、金が無かったのだ。

元々は家の建て直しに失敗した祖父の借金を引き継いだ事から、間宮奈々美の苦勞は始まった。

有澤の領地を真似ての現実世界からの領海整備——しかし、現実世界に於いて土地基盤を有していなかった間宮の家がそんなものを目指そうとすれば、どう考えても金が足りない。

現代の社会基盤が成立している状況において、都市丸ごと一つを一家が勢力下に収めようなどと、時間と金が幾らあっても足りるはずが無いのだ。

だが、それを押してでも恒久的な運用が可能な港湾を建造できれば大きな利益が見込めると、奈々美の祖父は判断したらしく——そしてあろう事か、一代で、自分の代のみでそれを成そうと借財を繰り返しながら無理を重ねすぎた。

結果、失敗。

残ったのは寂れた田舎町。無駄に広い道路に開いた駅ビルのテナント、シャッターの閉じた商店街に、当然、潮流渦巻く、港を作るには適さない荒れた海も。

そして、莫大な借金である。

現実世界の話であれば自己破産でもしてしまえば良いだろうが、生憎と祖父は魔法界に対して金の無心をしていたから、返済義務の放棄など、認められるはずも無く。

奈々美は、夜逃げした両親たちに代わり、間宮の名を継ぐ魔法使いとして祖父の借金の返済に当たらねばならなくなった。

唯一残った、リフティング・ホイール・ブラックシップ・バスケット導輪駆動船〈黒羊の草籠〉号に乗って、債権を有する魔法使いたちに振り回されながら。

「原因を差し置いても、借金が逆に増えてるっぽいのは明らかに奈々美が原因……四世のローンだって、まだ残ってるのに……」

因みに四世とは、現在の状態に修復される前のブラックシップ・バスケット〈黒羊の草籠〉号の事である。通商海路に襲撃を仕掛けようとした矢先、有澤船籍の

リフティング・ホイール
導輪駆動船に攻撃を受けて損傷した。

「そ、そう、四世、四世の敵だって撃ってやらなきゃならないだろ！？　ここで逃げたら女が廃るってもんだよ、リリ！」

「またその場しのぎで適当なこと言ってやすね、姐さん……んなことばっかやってるから、何時までたっても貧乏暮らしなのに」

「おだまり、デク！　ともかく黒崎の連絡があるまでは粘るんだよ！　あの陰険眼鏡親父が、この馬鹿でかいおもり錘を放ったままのはずも無いだろう！」

言いながら、奈々美は足元を蹴りつけた。

ブラックシップ・バスケット
涙滴を逆さに返したような〈黒羊の草籠〉号の船体。

その底部、涙の先から、今は巨大なペン先のような装置がぶらさがっていた。

「こいつのせいで動き辛かったらありやしないんだ！　捨てられたくなかったらとつとと連絡よこしなつてんだ！」

船体の三分の一程度にもなりそうなサイズの巨大な装置は、ブラ黒羊の草籠〉号の機動力を大きく殺いでいた。

明らかなデッドウェイトをぶらさげたまま逃亡を試みても、あつさりと追いつかれるのは当然の話で、だから迂闊に逃げるわけにも行かないと言う奈々美の意見にも、実は一理あったりするのである。

「……見つかる前に逃げちまえば一番よかったんすけどね」

「錘も捨ててね……捨てる？」

というか、捨ててしまいたい。

いかなる原理か、起動すると海魔を引き寄せるなどと言ういかがわしいことこの上ない装置である。

スイッチを切っている状況でも、長く手に持っていたものではないのだ。

「でも、切り離れた瞬間自爆スイッチがドカン！　なんだろうなあ」
「呪式の転送はまだ終わらない……」

ジリ貧のまま、ブラックシップ・バスケット〈黒羊の草籠〉号は引くも進むも出来ない状況だ

った。



「やっと、ついたよお……」

「二十五階……間違いないな……」

腕を組んでいる、或いは手を繋いでいると言うよりは、もういっそお互いを支えにしているようなふらふらとした姿。

「ええっとお、一階四十段として、掛ける二十五の……」

「やめろ、数えるな。心が折れる……」

階段の淵に座り込んで、息も荒く。

二人は漸くのことで、初等部、中等部、そして高等部の所属生徒たちすべてを束ねる学生会、その執行部執務室があるフロアへと辿り着いた。

「今度、奥様にエスカレーターの設定を提言しよう。もしくは、階段の途中途中に無料の給水施設とかをな……」

「今更だけど、裏側にあった業務用のエレベーターを使えば良かっただけじゃ……と言うか、あたしたちって何でこんなに苦勞してるんだっけ？」

「お前が変なことを言うからだろ……」

「あたし、見たままを言ったただけだもん……いっくんが信じないからいけないんだよお」

「信じたくないからここに着ざるを得なかったんだっての……ホレ、あと一息。そろそろ行くぞ」

「うにゃあ……足痛い……」

くたびれた態度の紗那沙を、ダイエットになるだろとか適当なことを言いながら強引に引き起こす。

そして、二人は廊下の角を曲がり。

「……ねえ」

「言うな」

しばらく歩み。

長い廊下の真ん中で、立ち止まり。

「でも……これ、どう見ても」

「言わないでくれ、もう心が折れてるから……」

見晴らしの良い窓の向こうに広がる景色に、二人は啞然と言葉をなくした。

——ざああん。ざああああん。

潮騒が、耳の奥で鳴り止まない。

頭痛すら覚えそうなほどに、煩く響き続ける。

「頭が痛くなってきそうだな……」

「あの、いっくん。あたしにも聞こえてきたかも……波の音。こう、ざざ〜んって」

「……さなちゃん、キミは疲れてるんだよ」

それは幻聴だと言う口調で、郁斗は言い切った。

「いっくんが言い出したことだね！　っていうかここ、共感を得られて喜んでくれる場面じゃないの？」

「いや、むしろ幻聴であって欲しかった……」

「それを言うなら、幻覚だったほうが……」

——ざああん。ざああああん。

波の音は、いつまでたっても、どれほど冗談で誤魔化そうと二人の耳に届いてしまう。

それも、当然だろう。

窓の、向こう。

本来であれば夕焼け空が彩った世界が広がっていなければいけないのに。

窓の向こう。

本来ならば、帰宅を急ぐ生徒たちが人波を作る学園の放課後の景色が、見下ろせなければならぬのに。

だけど、だけど郁斗の視界に見えるその光景は。

轟と鳴り響く音が、窓を揺らす。

ぎしぎしと窓枠をゆらして、或いは押しつぶそうとするかのごとき圧力をいっばいに押し付けてきている。

そこに広がっているのは。

窓の向こう。見える範囲の空も校舎も、学園の敷地全部、全部が。

「海の……底？」

震える声で呟いて、だからそうとしか、思えない光景だった。

そこは深い海の底。

窓の向こう、学園の敷地いや、城乃下^{きのした}の街が、更にその先、四方を囲む山々までが、その全て、荒れ狂う激流の中にあった。

学園中央塔最上階。

高さ百メートルの位置から見下ろせる城乃下^{きのした}の街並みは、軒並み海の底へと沈んでいた。

見渡す限り、海の底。間違いなく。

空を見上げれば、空など見えず、果ての無い深海の闇が広がっているのだから——だから。

此処は間違いなく、海の底だ。

「ふぁんたじい……」

「いや、マジで……これ、現実なのか？」

ある意味で絶景。そして正しく気が狂いそうな、それは海底の景色に違いなかった。

「下、人……居ないね」

「居たらまずいだろ。海の中だぞ、ここ……」

「そだね、溺れちゃうもんね……ねえ、山の向こうまで、海の中みたい」

「そりゃ、空まで完全に水没してるんだから、陸地があったらおかしいだろ」

「そっかぁ……かしこいねえ、いっくんは……」

見たままをぼつぽつと呟くことしかできない状況。

因みに、高等部施設が本来存在するべき場所が更地が変わっていたことに関しては、最早二人とも突っ込む気が失せていた。

「……なあ」

呆然としたまま、最初にそれに気づいたのは——否。

最初にその現実を受け入れたのは、郁斗のほうだった。

見たままの光景を、本当は二人とも、確り目撃していたのだから。

「学園の周りを囲っている光の壁は、何だと思う？」

この中央塔を中心にして円形に広がる学園の敷地を囲うようにして、垂直に、彼らの視線の高さまで、青白く光り輝く壁が、競立っていた。

「……ばりやぁ？」

間拔けな答え。冗談染みた。しかし郁斗は、否定せずに次の質問に移った。

「なるほど……じゃあ、学園中に書かれてるっぽい光の模様は？」

「まほーじん、とか……」

魔方阵。なるほどそうとしかいえないだろう。

学園の広い敷地内を、光の壁に囲まれた内側の地面を、光のラインが複雑な文様を描いているのだから——なるほど、文字通り絵に描いたような魔法陣に違いなかった。

「つてことは、駅の方で、たまにぽつぽつ光って見える円形の模様も、魔方阵だよな」

「うん。お空に街を覆いつくすように広がってるでっかい曲線も、多分魔方阵の一部だよ」

空を埋めつくす深海と、この城きのした乃下の街を隔てるように、恐ろしく巨大な魔法陣が、遠い場所に円を描いている。

その巨大な魔法陣が光源となって、深海の内部に存在しているこの城きのした乃下市を照らしているようだった。

「……ところで、あのビル街のほうを泳いでいるネッシーっぽいのは何だと思う？」

海底の町の上を、巨大な魚とも恐竜ともつかない者達が、何匹も泳いでいた。

その中でも取り分けサイズの大きいものを指差す郁斗に、紗那沙はあゝ、とだらしなく口を開いたまま答えた。

「ネッシーじゃない？ あ、城きのした乃下だからキッシーかも。……キッシーは鯨よりもおっきいんだねえ」

「鯨……なのか、アレ。鯨にしては、鯨っぽい形してるけど……あ」「撃たれた」

二人の診ている前で、光線が飛来して、鯨とも鯨ともつかない化け物が撃たれた。

腹を撃ち貫かれて、血も吐かず臓腑も撒き散らさず、ましてや死体も残さず、塵になって消える。

「……すごいビーム」

「……ふあんたじいっつか、ビームだとSFの類なんじゃねーの？」

「そだねえ。何か、『ゆーふおー』っぽいのがお空を飛んでるし」

「未確認飛行物体、なあ……まあ、輪っかの内側に胴体とか、確かにそんな感じだけど。UFOって海の中も飛べるのか？」
それ以前に、海の中を『飛行』とかおかしいよなど、おかしい状況の中でおかしなことに疑問を感じてしまった。

時折、化け物たちに勝る速度で、それと同様の大きさの物体が、高速で。

海中にうねりを残しながら、華麗に動き回っていた。
数は、恐らく二つ居る。

そのどちらもが、人工物としか——『乗り物』としか思えない本体の周りに、巨大な円盤を回していた。

円盤——本体が潜る大きさの穴の開いた輪の数は、それぞれ違う。

黒い物体の方は、横並びに三つ。青い方の物体は、縦に上下二つ。光の粒子を零しながら、回転しているのが見える。

そして、時折円盤の残像のような光の円形模様——魔法陣が背後に現れて、そこから先に鯨とも鯨ともつかない化け物を消滅させた光線を、互いに向けて撃ち合っていた。

「……戦ってる、んだよね？」

「多分……ねえ、あれ、上に誰か乗ってない？」

「乗って……僕には見えないけど……さなちゃん、目が良いみたいだし」

あの未確認飛行物体はどう考えても人が作った乗り物としか思えないから、誰かが乗っていても可笑しいとは思えなかった。

尤も、それが解ったからといって『だからどうしろと？』と言う状況からは一片たりとも展開していないのだが。

二人に出来たのは、ただ呆然と、窓の外を見送る事だけだった。



「何がしたいのです、あの人たちは……?」

疑問と言うよりも、苛立ち。

翼を閉じた白鳥の背中の上——〈青薔薇の小夜曲〉ブルーローズ・セレナーデ号の艦橋で舵輪を握りながら、有澤ミラノは呟いた。

「領内に侵入を果たしたのも、深海の海魔を引き連れてきたのも見事と言えば見事……と言うには強引に過ぎますが、ともかく」

目的を果たしたのであれば、速やかに領海から離れるべきだろう。こうして〈青薔薇の小夜曲〉ブルーローズ・セレナーデ号が迎撃に出てくることが解りきっていたはずだし、加えて航路安定のために巡視に出ている艦船もいずれば帰還してくることは目に見えているのだから。

「何か目的が——」

目的がある。

あつて当然だろう。考えるまでも無い。

でなければ、海魔を領海内に引きずり込むなど、しない。

「特にノーチラス級は……っ!」

ぐおん、と自由な態度で首をもたげたノーチラス級の腹の下——
—駅前アーケード外の屋根の上を潜り抜けながら、ミラノは表情を苦くする。

一瞬では潜り抜けられない、圧倒的な巨体。

何時までも領内に逗留願う気分になれるはずも無く、しかし海賊船を追い散らす片手まで相手をするには、あまりにも危険すぎた。

「っ、邪魔です! 一番三番、ほうもん砲紋放て!」

「かしこまりましたお嬢様。アタック・コード攻性魔陣式二号、レッサリアの短剣、コン・シイル開封」

進路上に立ちふさがってきたインビシブル級に向かって、〈青薔ブルー・セレーナードの小夜曲〉号は背後に浮かべていた砲紋ほうもんに、既に詠唱完了していた攻性魔陣式を解き放つ。

円筒形の立体魔陣式から、魔法使いの魔法力によって指向性を与えられたシオ——魔力を凝縮した光弾が、一直線に鯨のような姿のインビシブル級海魔目掛けて突き刺さる。

光弾は発射から間断なくインビシブル級の胴体を穿ち、それをシオの結晶、淡く光る塵へと変えた。

「……ノーチラス級にも、効くかしら？」

肩に掛かった青い髪束を払いながら、ミラノはなんとはなしに言う。

「あの巨体を構成するシオの密度を考えると、やはり、一撃で仕留めるには多重詠唱級の大規模攻性魔陣式アタック・コードで無いと……」

艦橋下部に備わったオペレーター席から、やるせない声が応じた。ミラノと同様の、白地に青のラインの入ったセパレートタイプの戦水衣せんすいを纏った、天瀬由宇あまがせである。

水色の髪を揺らしながら、背後の主に振り返る。

「如何に〈青薔薇の小夜曲〉号と言えども、複数の砲紋ほうもんを連結して多重詠唱を行おうとすれば、お嬢様に掛かる負担も甚大なものになります。詠唱に魔法力を傾けるとすれば……」

「解っています。〈黒羊の草籠〉号ブラックシープ・バスケットを追いかける脚が無くなる、と言うことでしょう？ とはいえ、下手な魔法で手負いの状態にしてしまいうのも、また……」

ノーチラス級の巨体である。身をのたうちまわらせるだけでも。

「領内の結海が……」

「です、ね。——このまま羊を仕留めるまでのんびりしていくれると助かるのだけだ」

割れながら消極的に過ぎると、ミラノは自らの言葉に苛立ちを覚える。

「ともかく先ずは、羊を仕留めます。ついでに、可能な限りインビ

シブル級も。一番、三番、砲紋ほうもん再展開。攻性魔陣式アタック・コード四号入伝！」

「かしこまりました。攻性魔陣式〈聖エルザの投槍〉、詠唱開始。入伝完了までカウント十七」

「続いて、砲紋ほうもん二番攻性魔陣式射出、目標……っ！？」

目標、〈黒羊ブラックシープ・バスケットの草籠〉号。

指し示そうとして、しかし舵輪の脇に備わったコンソールに示された表示に、ミラノは眉をひそめた。

オペレーター席の由宇が、解析の結果を伝えてくる。

「通信波が、領海外部から伝わってきています。発信源特定不能。波長計測、識別取れません！」

「味方ではない、と言うことは確実ですね。——さて、何を仕掛けてくるのか……」

戦水衣せんすいに包まれたスレンダーな肢体を抱きしめるように腕を組みながら、ミラノは眼前の〈黒羊ブラックシープ・バスケットの草籠〉号を睨んだ。



九話（後書き）

掴みを良くするためにも、この辺りを一話で先に載せておくべきだったのかなあと今でも悩んでたり。

いやむしろ、ラノベ文庫換算で言えばもう百ページ超えてる場面なのに、未だに主人公が状況を理解していない展開の遅さに問題があるような……。

もうちょっとシンプルに纏めきりたいものです。

十話

『やあやあ、おまたせしましたあ。もおくしわけ、ごさいません。少し突発的な事態が発生しましてえ』

にこやかに。

にこやかであるからこそ、他者に嫌悪を感じさせる。伝わってきているのは暗号化された通信音声だけだと言うのに、聞くもの全てが得も言えぬ悪寒を感じてしまう、最早それは一種の才能とすら言えた。

「遅いんだよ黒崎！」

そして、それに対して、感じた悪寒を怒りに変えて、そのまま罵声を叩きつけられるのが、間宮奈々美と言う女だった。

戦水衣せんすいに押し込められた胸を揺らしながら、備え付けの通信端末に向かつて怒鳴りつける。

『いやいや、申し訳ありません。反省も弁明もし様がありません。全ては私の不徳わたくしの致すところ。間宮さんには大変なご苦勞を……』

「あー、黒崎の旦那？ こっち今取り込み中なんすけど！ 用件あったら手短にたのんますよ！」

『おや、その声は山戸家君やまとやですか？ と言うことは、傍には当然リリーナさんも……』

「ウザい……そしてキモい」

通信音声越しだというのに、何故か舐めるようなべたつく視線を感じてしまい、リリーナは小さな身体を震わせた。

『はっはっは、小さなお嬢さんに罵声を浴びせられるなんて、溜ま

りませんなあ』

「アンタの歪んだ性癖なんてどうでもいいっつーの……それより何？ 撤回していいんすか？」

「ちよつとデク、艦長はあたしだよ！ 勝手に話を進めるんじゃないよ！ 黒埼も、あたしの妹分に変な目向けるんじゃない！」

『変な、とは心外な。是非とも愛のある、愛に溢れた、と言ってもraithたいところですが——まあ、報われぬ、伝わらぬからこそ愛と言うものでしょう』

やれやれ、と芝居がかった仕草でため息を吐いているだろうことは容易に想像がついた。

リリーナのような年端も行かぬ少女に向かって、愛だの恋だのと、平然と言えてしまうのが、この通信の向こうに居る筈の痩せて枯れた中年だったからだ。

『それでリリーナさん。仕掛けの準備は終わりましたか？ 勿論、渡……しておいた祝式の事です』

「——っ！」

リリーナの愛らしい顔立ちが、その言葉で嫌悪と憤怒に染まる。

「祝式？ リリ、なんのことだい？」

艦長席から届く不思議そうな声にも応じられない。

「ここまで想定済みだった……っ！」

『すばらしい。物分りの良いお嬢さんは大好物……いえいえ、大好きですよ』

リリーナの怒りに満ちた声に、しかし通信越しの男の声は恭悦染みていて気持ち悪かった。

言葉の意味を理解した弥一郎が、吐き捨てる。

「じゃ、何すかアンタ。俺らが祝式を仕掛けに移しちまおうって考えるだろうってのも、計算済みだったってことっすか？」

『貴方たちなら、私の期待に答えてくれると信じていましたよ』

「デメエ……」

ギリ、と齒を噛み締める。奈々美は解らないと首をひねった。

「何の話だい、デク？」

〈教導体〉^{コミュニテイ}によって修理の完了した〈黒羊の草籠〉^{ブラックシープ・バスケット}号は、巨大な錘をぶら下げているとともに、艦内制御機構内に呪唱機関^{シール・ドライブ}をオーバードライブさせて自爆させる呪式が隠匿されていたのだ。

一定期間の経過後、或いは外部からの入力によって作動する呪式である。

呪式の設置の理由は考えるまでも無いだろう。

〈教導体〉^{コミュニテイ}は〈黒羊の草籠〉^{ブラックシープ・バスケット}号を、この有澤の海で使い潰すつもりだったのだ。

明らかに気前の良すぎる依頼だったため、弥一郎とリリーナにはその事が直ぐに察知できた。

だが、その事を奈々美^{ななみ}には伝えていない。

伝えてしまえば、直情的に過ぎる彼女の事だ———確実に、〈教導体〉^{コミュニテイ}を敵に回そうとする。

弥一郎とリリーナを殺そうとしたから、〈教導体〉^{コミュニテイ}と敵対しようとするのだ。

現実世界ですら確かな力を持つ魔法界きつての大組織に対して、奈々美は仲間の危機とあれば容赦なく喧嘩を売ろうとするだろう。

仲間思いの———はみ出し者の二人にとって、それはありがた過ぎる話であり、だからこそ、そんな無謀を奈々美に選択させる訳には行かない。

『お二人は私の依頼をよく理解し、言われる前に私が望んだとおりの行動を取ってくれたのですよ。間宮さんは良い部下をお持ちです。全く、私の部下にも見習わせたいくらいですよ』

「……どうしてアンタに褒められると、全く嬉しくないんだろぅねえ？」

事情はわからずとも、どう考えても喧嘩を売られているに違いな
いと、奈々美ですらそう受け取れた。

「いいから、とっとと伝えるべき事を伝えるべき……」

苛立ちを隠さない声で、リリーナが言う。一秒でも長く言葉を聞
いているのも苦痛だったらしい。

『おやおや、これは失敬。では、例のアレ、最大出力で起動後、呪
式のタイマーを入力して——あちらへ、撃ち込んじゃって下さい』
揶揄するような声とともに、圧縮通信で位置情報が転送されてき
た。

管制席の弥一郎が目を剥く。

「オイオイオオ。本気で港をぶっ壊すつもりなのかよ！ 正気か
？ あん中には連合や起業、^{カンパニー}教会の船だって居るんだぞ！？」

「はじめから港を破壊するのが目的だった……。港を破壊、海域内
を混乱状態にして……。現実空間で、何をするつもり……。？」

『おやおやリリーナさん。そこまでお気づきでしたか。いやはや優
秀なお方ですね。惚れてしまいそうです』

「死ぬ。……海域内を混乱させるだけなら私たちを領海内で自爆さ
せるだけで充分だったはず。港を破壊して有澤以外の勢力にまで喧
嘩を売る理由が無い」

『おおおおお、すばらしい。当初のスケジュールも全て了解してい
てくださっていたとは。流石リリーナさん。——ですが残念な事
に、どんな仕事であっても完璧に予定通りにスケジュールが進行す
るとは、限らないのですよ。往々にして、順調に進んでいる時に限
ってイレギュラーの発生はあるものです』

「イレギュラー？」

眉根を寄せるリリーナ。通信越しの声が、さも可笑しげに応じる。

『ええ。——銀貨を一枚、海に落としてしまいました』

「銀貨……アンタの悪趣味な骨董品集めの話か？」

『ははは、悪趣味とは間宮さんも手厳しい。ですがまあ、骨董品、と言うことには間違いないですね。年代モノの貴重品ですから、是非とも海から回収したいのですが——これがまた、網に引っかかっちゃいまして手が届かないのですよ』

本気とも嘘とも判断のつかない男の言葉に、しかしリリーナは思い当たるものを見つけた。

董色の髪を揺らし、目を見開く。

「銀貨……網。海の中……まさか」

『おや？』

リリーナの思考を悟ったのだろう。男は楽しそうな声を上げる。そしてリリーナを、賞賛した。

『流石は、さ・す・が・はリリーナさん！ 良く良く勉強していらつしやる。——貴女に薫陶を授けたお父上も、大層お喜びでしょう』

「……殺す。戻ったら絶対に殺す」

自身を売った人間の名前すら示してくる男の声に、リリーナは怒気を隠せない。

それは、同じ艦橋に居る大人二人が声を掛けるのを躊躇うほどに、黒く渦巻くような怒りだった。

——だが。

『でしたら、無事に戻ってきてもらうためにも、ちゃんと仕掛けを置いてきて頂かないと。——でないと』

「——っ!？」

「なんだい！」

緊急警報。艦橋内の全コンソールに一斉にレッドアラートが吹き

荒れる。

敵機による砲撃を受けた訳でも、岩礁が目前に迫ったわけでもなく――異常は、内部から。

「呪式が……！」

「起動している！？ カウント五十で起動！？」

「なんだいなんだい！ おいデク！ こいつは一体……！」

データ移送中の自爆呪式が、勝手に起動を開始した。

呪式のデータの大部分は、まだ〈黒羊の草籠〉ブラックシープ・バスケット号本体に残ったまま。

船底に吊り下げた仕掛けの呪唱機関へ、対象を移し変えるにはまだ時間がかかり、ならばこの状態のまま放置しておけば、当然結末は――。

『さあ皆さん、依頼料分のお仕事を、期待していますよお？ ああ勿論、外海に捨てようなんて無粋な真似を企んだ場合は……解りますね？』

「なにやってんだいデク！ 仕掛けが起動してるよ！ 黒崎、まさかアンタが何か……っ、切りやがったな！」

ガン、と通信端末を殴りつける奈々美。嘲笑染みた言葉を最後に、通信波終了していた。

「まずいね、こりゃあ……っ！」

奈々美ですら焦燥感を覚える状況。

コンソールに表示された情報には、懸架されている海魔を誘引するための仕掛けが最大出力で機動を開始している事を示している。

それは即ち、付近を回遊している海魔達が、〈黒羊の草籠〉ブラックシープ・バスケット号を目掛けて。

「あの変態親父が！」

毒づきながら、仕掛けの排除工程に移る弥一郎。

「奈々美、進路変更、〈青薔薇の小夜曲〉ブルーローズ・セレナーデ号の脇を抜けて港を目指

す。急いで！」

リリーナもまた、焦燥をそのままに叫ぶ。

今や懸架された装置は、内部に独自に備えた呪唱機関シール・ドライブを最大出力で起動していた。

不気味な魔力の明滅とともに、駆動の音が潮の流れに乗って有澤の領海内に響き渡る。

——イイイイイイイイン……。

〈この妙な音……貴女——何をしたのです！〉

有澤の姫君も領海内の異常に気づき、声を荒げる。

今や海魔達は、潮の流れを完全に無視して、一心不乱にブラックシープ〈黒羊の草籠〉号に迫っていた。



「……なんの、音？」

「うえ……耳、痛い……」

廊下で立ち尽くしたままだった二人は、窓の向こうから響いてくる音に、耳を押さえる。

——イイイイイイイイン。

ガラス片をかき混ぜたかのような音が、急に辺りに響き始めた。

暖かな波の音を乱す、生理的な嫌悪感を感じてしまうような音だ。

「窓の向こう……黒い方、かな？」

「ホント、だ……なんかぶら下げてるのが、光って……光……って、いっくん、周り！」

黒い船の中に現れた変化に眼を奪われている間に、海の中に大きな変化が起こり始める。

「キッシーが……鯨が」

「なんだ、あれ。黒いのに、集まってきてる……誘蛾灯？」

夜中に羽虫を呼び寄せるための灯りの如き光景——それを数百倍にスケールアップしたものを海中で再現すれば、こうもなろう。

海中を漂っていた巨大な化け物たちが、潮の流れに逆らって、一直線に黒い物体に集い始めていたのだ。

大型トラック並みの大きさの鯨も、ビルを容易く押しつぶせそうな大きさの、首長竜も。

底部から吊り下げた何かを光らせる黒い物体に、次第、次第に引き寄せられていく。

そして、黒い物体は。

「……こっちに、来る？」

「来るって……ちょ、おい、おいおいおい！」

黒い物体が、周囲に浮かべる輪を高速で回転させながら、学園——二人の居る方向に向かって、加速を始める。

黒い物体が向かってくるのであれば、当然それに引き寄せられている——、

「キッシーも来るよお！」

「ぶ、ぶつか……違う！　ぶつけるつもりか！」

明らかに意図的な行動だと郁斗には思えた。

黒い物体は、あの吊り下げた装置を動かして、きっと化け物たちを引き連れて学園に向かってきている。

あんな馬鹿でかい生き物がぶつかったら、この学園は。確実に。

「青いのが！」

黒い物体の進路上に、青い物体が道を塞ぐように立ちふさがる――これで安心、出来る訳も。

海の中を自由気ままに泳いでいた怪獣達は、だから、一箇所に集い集まるためには方々から押し寄せてくる。

恐らくは青い物体には予期せぬ角度から。

ただ一心に黒い物体を目指す鯨の一体の、体当たりを受けて体勢を崩してしまった。

鯨に弾き飛ばされ、海底の街並みに叩きつけられる青い物体。

それに全くかまわずに、黒い物体は学園を目指して突っ込んでくる。

学園を囲う、光の幕に激突するまで、もう僅か。

「来るっ――……ぶつかる!？」

黒い物体の激突。

それは同時に化け物たちの激突をも――だが、あろう事か。

黒い物体は直前でぶら下げていた光る装置を切り離した。

潮を唸らせ強引に進路を変える黒い物体。切り離された装置はしかし、慣性の命じるままに当初の進路――学園を覆う光る幕目掛けて、激突した。

まだ、衝撃は無い。光の壁が、完璧に光る装置を弾いたのだ。

学園の脇をすり抜けていく黒い物体の背後から、青い光線が何条も追いつがるのに気づいたが――しかし、そこに意識を留めている余裕は、二人には無かった。

ぶ……つ……かった。

ゴォン、ゴォンと。

先ずは小さな、身軽そうな鯨たちが、何体も何体も、次々に揺れる、揺れる。

窓を震わせ、天井から埃を零すような揺れ。

「~~~~っっ！」

「にゃあああ!？」

悲鳴を上げて互いにすがりつく体勢の二人。

だがまだ、悲鳴を上げている余裕があるだけ、マシだったのかもしれないと——そんな事を考える暇すら、最早与えられず。

太く丸まった胴体と、長い首と、大きな鰭と、尾と、頭を持った

——あまりにも大きすぎる化け物が、遂に。

轟音。最早表現できない規模の、すさまじい振動。

「つにゃあああああっ！」

「お、おとおおっ？」

巨体の激突は光の壁を容易に打ち破る。光は、ただの光へ、塵へと消えうせて——だから、勢い余った巨体はそのまま、学園の敷地へと身を投げ出して。

激突。振動。最早爆発とすら評するべき。

この世の生き物とはとても思えないような悲鳴、或いは衝撃波ですらある、文字通りの音の波が、校舎を、窓を揺らす。

立ってなんて居られるはずがない。

耐えられる筈なんて、無い。

そして。

びりびりとした衝撃に、続いて、ピシリ、と、ピシリ、ピシリという音が。

郁斗の耳に、届いた。

「走るぞっ！」

「え? ええっ？」

突然引きずられて、言葉で急ぎ立てられて紗那沙は戸惑う。

「にゃ、にゃに!？」

何も無かった。

そこには、壁だけしかなかった。

——曲がり角? そんなものは無い。

つまりはそこが、行き止まり。

ざあああああつ、ざあ、ざつ、ざあああああああん。

思考を取り戻す暇もなく、現実の濁流が二人を襲った。

最早吹き抜けに等しい、すべての窓が砕け散った廊下。

大海から流れ込む水が、二人を飲み込んでいく。

「いっ……いっ……いっ……」

「さなっ——っ!」

激流にもまれて、紗那沙の手が離れていく。引き離されてしまう。

海の中、海の向こう、荒れ狂う波間に流されていく。手を伸ばそ

うとしても届かない。

もがいても、それでどうにかなるほどに——深海の底に人の自由は無かった。

「がっ……げっほお!？」

息を止める間もなく水が身体を飲み込んでしまったから、だから、口を閉じる事も出来ずに肺の中まであっさりと水浸しだ。

嘔吐感。それ以上の、苦痛。心の臓腑身体の危機を、脳が意識の異常を訴えるほどの、危険、危険すぎる状況。

(溺れる……死ぬ?)

海の底に、身を沈める。

全身で感じる、水の重み——それで漸く、郁斗は思い出す。

生まれる前の、記憶を。

死んだ後の、会話を——邂逅を。

〈仮にキミが一人で海上——つまり現世を目指そうと試みたところで、精々途中で潮流に揉まれて我を失い、海魔に成り果てるのがオチさ〉

まったく持って、その通り。

こんな酷い荒波の中で、自由に身動きなんて出来るはずがない。

人は生身では、一人では海を征くことは叶わないのだから。

ならば、どうする？

ならば何が、必要だ？

この海の中を進むために——目的の場所に、辿り着くためには。

(……目的)

目を見開く。

霞んだ視界の中に、紗那沙の桃色の髪を、捉えてしまった。

手を伸ばして、届くはずも無く。

〈キミの魂に私の召喚式を刻み込む。魂の奥深く、転生しても決して消えないように。キミは現世へと戻ったら、その式を発動して——私を、呼んで欲しい〉

答えは既にあつた。生まれたときから。

生まれる前から——死んだ後と、生まれる前の、その間に。

〈私はキミと言うあらたな保有者^{オーナー}に迎えられて、堂々^{オーナー}とこの海底から浮上できる。——そうとも。私はキミに、私の新たな保有者^{オーナー}であることを求めている。私を求めることを、キミに求めているんだ〉

なるほど、お前の言いたいことは解った。

解った……けど。

（そういえば、お前の……名前は）

覚醒と途絶を繰り返す朦朧とした、時間から引き延ばされてしまったかのような意識の狭間で、郁斗は十二年以上も前に尋ねた言葉を、繰り返す。

へ言っただろ。キミに保有者になって欲しいと。私の保有者はキミだ。だから、※※を決めるのは、保有者たるキミでなければならぬ。——そうだね、格好良い名前を頼むよ

（……いきなり、そんなことを言われても、な。……作られたときの元々の名前とか、無いのかよ）

へ私が作られたのは戦争が末期も末期。国が滅ぶ寸前と言った有様の時代でね。呑気にアレコレ名前を考えている暇なんて無いような状況だったのさ。だから、開発番号をそのまま登録して、戦線に投入されて……その挙句が、今だね。因みに開発番号は……

（七番、か。——じゃあ、忘れても困るし解りやすく……）

へ安直だな、オーナー。……少しは悩んだんだろうね？ 構わんがね、あまり仰々しい名前も好みではないし。——ではその名前を、召喚呪式の開封鍵語キークードとしよう。私の姿を思い浮かべ、その名で私を、呼んでくれ

呼んでくれれば。

呼べば。

その名を——その名は。

安直に過ぎて忘れられるはずも無い、その名前を呼べば――。

「セブン」

単純極まりない語句を、郁斗は呟く。

海中で、しかしはつきりとその単語を、呟くことが出来た。
だから――だから。

銀の光が郁斗を中心に巻き起こり、荒れ狂う激流にすら勝る速度で、螺旋を描き文字を刻み光線の軌跡が円を重ねて球状へと変化し、そして幾何学の文様で完成した球状魔方陣が広がり、広がり、広がり、眩く輝きながら海中を満たして、最早目も開けていられないほどの輝き、巨大な銀色の球体を形成して――そして、遂に。

十話（後書き）

あらすじでいきなり誤字つてるとかマジで無いわな……。
癒えぬ病だなあ、やっぱ。気をつけたいものです。

さておき、何か漸く主人公がー……って驚きよりも真性の変態っ
ぽいのが出てきたことの方がよっぽど驚きなような。

十一話



しまった。

そう思ったときには遅かった。

「なんて迂闊……っ！」

「姿勢制御利きません、地表に激突します！」

「防壁魔陣式、緊急展開！ 接触部分に最大出力で……っ！」

最早遅い。

ブラックシープ・バスケット

〈黒羊の草籠〉号目掛けて最大加速を掛けようとした矢先のことだ。

横合いから躍り出てきたインビシブル級海魔との予期せぬ激突は、
ブルローズ・セレーナード
〈青薔薇の小夜曲〉号の進路を逸らして余りある一撃となった。

船体が軋み、船体上下に位置する魔導輪ホイールが規定位置を保てず不安定な傾きを示し——あるべき浮力を失い、残った推力のみが船体を望まぬ向きへと加速させる。

即ち、地表——現実界に存在する本物の海で言えば、海底を意味する城乃下きのしたの街へと。

斜めに姿勢を崩した白鳥が、土砂と瓦礫の山、粉塵を巻き上げながら身を投げ出した。

「きゃああああっ！」

「……うっ！」

甲板後部の艦橋に立つミラノと由宇が、激突の衝撃に苦悶の声を上げる。

落下激突したのは、学園目の前。駅へと続く四斜線の主要道路。街路樹と街頭をなぎ倒しながら、船底がコンクリートを削り続ける。

「機関緊急停止！ 底部魔導輪座標位置上げ！ 丈夫魔導輪出力最大！」

垂直一軸二輪の魔導輪ホイールの底面部に位置する、今はコンクリートを抉り続けるしか役目を果たしていない方の回転を停止させ、残った天井にある魔導輪ホイールのみに出力をまわしてとにかく船体を持ち上げようと図る。

「お嬢様、黒羊が！」

「防壁にぶつかる……海魔をぶつける気ですか！」

振り返って仰ぎ見れば、校舎を守る防護隔壁へ向けて、ブラックシープ・バスケット〈黒羊の草籠〉号は一直線に速度を上げている。

背後には、何体ものインビシブル級海魔が続く。明らかに海魔は、ブラックシープ・バスケット〈黒羊の草籠〉号を追いかけていた。

そして勿論、有澤の領海内に侵入した海魔は、中型のインビシブル級だけではない。

黒く巨大な影が、漸く船底を地表より持ち上げたブルーローズ・セレナ〈青薔薇の小夜曲〉号の上を過ぎ去る。

「いけない……！」

巨体。それだけで既に暴力と言える存在が、港を守る防御隔壁を―――隔壁へと進路を向けるブラックシープ・バスケット〈黒羊の草籠〉号を追って、征く。

最早、港は目の前だ。

今から急停止を掛けたところで、その行き脚が止まることなく―――ならば、この後に待ち受ける光景は。

ブラックシープ・バスケット〈黒羊の草籠〉号が舵を切る。

港の脇を、防護隔壁に激突する寸前、ギリギリの位置で。

船底に吊り下げていた錘を切り離しながら。

錘は、明らかに何かの魔法装置だ。シル・ドレイフ呪唱機関を内蔵し、正体不明

の魔法を、船体から切り離された後も発動し続け——だからそれに、海魔達は群がっていく。

激突。

激突激突。

激突激突激突激突。

学園目の前で切り離された魔法装置目掛けて、海魔が突っ込む。つまりそれは、勢いに任せて港を守る防護隔壁へと激突していくことを意味していた。

中級海魔の、尋常ではない加速による激突は防御隔壁を立て続けに揺らし、ダメージを与えていく。

だが、インビシブル級海魔程度の情報密度の激突であれば、数は多かれど、耐え切ることが出来ただろう。

艦砲級の大規模攻性魔陣式アタック・コードに対する想定強度を有した防御隔壁である。

中級海魔程の高密度であろうと、防ぎきれ——防ぎきれた。しかし。

「ノーチラス級が！」

高層ビルを余裕でなぎ倒して余りある巨体が、全速力で向かってきたとしたら——そんな想定は、どだい無理な話で。

遂に発生した理不尽に港の防護隔壁はその機能を消失した。

あっさりと。手鏡が床に落ちて、砕け散るような容易さで——隔壁は崩壊した。

隔壁が割れる。

不意の激突で姿勢を乱した巨体が投げ出される。

それはあたかも、直ぐ先ほどの〈青薔薇のブルーローズ・セレナーデ小夜曲〉号の無様をスケールアップしたような光景で。

港に、ノーチラス級の巨体が、崩れ落ちる。

巻き起こる衝撃波、粉塵は先ほどの非ではない。

激流の渦が漸く船体を引き上げた〈青薔薇の小夜曲〉号を襲った。
ブルーローズ・セレナーデ

「防壁魔陣式、正面へ集中！ 底面魔導輪再起動！ 機関最大！
シールド・コード ホイール

急速浮上！」

「了解……！」

ホイール 導輪船内部で船首の向きを逆転し、激流から逃れる形で——勢いに逆らわず、そのまま船を浮かせる。

木っ端と散り荒れる瓦礫の嵐から逃れるために。

逃れるだけ？

体よく港を破壊されて、無様に何もせずに逃げるだけ？

「……全砲紋、照準！ 目標〈黒羊の草籠〉号！」
ほうもん ブラックシープ・バスケット

「お嬢……っ！？ 了解！ 全砲紋照準。目標、〈黒羊の草籠〉号」
ほうもん ブラックシープ・バスケット

！
一瞬目を剥いた由宇だったが、しかし直ぐに頷きコンソールを叩く。

先ほどまで戦闘中だったが故に、全ての砲紋には既に魔陣式が入伝済みである。
ほうもん

だがそれを港に乗り上げたノーチラス級に向けたところで、どう考えても逆効果だ。

腹を抉って、しかし決るだけで致命打にはなり得ぬ攻撃では、相手を怒らすだけで逆効果にしかない。

そこから嵐に流されるインビシブル級など、後で幾らでも仕留められる。

——であれば、狙う敵は一つのみ。

学園の脇をすり抜けて、荒っぽい軌道でそのまま領海からの離脱を図っていることがはっきりと解る——あの、忌々しい下手人を。

「全砲紋、開封！」
ほうもん コン・シイル

怒りに染まったが故に出来る、冷徹な一斉射。

展開された計八門の砲紋ほうもんから、青い魔力光線が解き放たれ、入力された自動追尾の呪式の命ずるとおりに、円弧の軌道を描きながら船尾を向けていた〈黒羊の草籠〉号を指す。

回避、回避、回避、防御、防御、防……直撃。

八条の光線は軌跡を描く最中、枝分かれして数を倍増しにし、周囲四方から回避を許さぬ攻撃を〈黒羊の草籠〉号に見舞った。

いかに航行技術に優れていると、軌道のすべてを封ぜられてしまえば、避けられようもない。

防壁魔陣式を貫かれ、先ずは魔導輪ホイールを掠めた光線は、次々と船体そのものを叩いてゆく。

その一発が呪唱機関を穿ったのだろうか。

〈黒羊の草籠〉号は明らかに姿勢を乱して行き足を損失。そしてそのまま、浮上から墜落へと大きく角度を逆転した。

搭乗者の魔法力によって取り込んだシオを魔力——動力へと変える呪唱機関を失ってしまったえば、導輪駆動船は碌な機動を行えない。独力で永続的な稼動を実現する魔導輪ホイールが保障するのは、あくまでシオに対する船体の浮力の確保のみなのだから。

呪唱機関が生み出す推力を失った導輪駆動船など、帆を失い漂流する帆船にも等しい無力な存在だった。

——ならばもう、〈黒羊の草籠〉号を意識に留めておく必要はない。

当然、悔恨や失意に気を取られる優雅な時間を選ぶ暇もなく、今はただ、手遅れなれど、役目を果たすのみ。

「一番から六番、砲紋連結。攻性魔陣式零号多重詠唱開……っ！」
ほうもん アタック・コード

必殺の一撃。

複数の砲紋ほうもんを用いた主法の詠唱を試みようとして、ノーチラス級を殺しうる一撃を唱えようとして、しかし、その光景を目にしてミラノは言葉を止めた。

白い光——白い光？

否。

それはあまりにも、白と表現するには眩すぎた。

「……銀」

そう、銀色だ。

紛れもなく銀色の魔力光が、忽然と姿を現した。

学園中央塔——港の管制塔の正面の広場に身を投げ出す、ノーチラス級の真上の位置に。

光が集い、弧を描き円を結び、そして陣へと姿を変えてやがてそれは折り重なって一つの球となった。

「球状立体魔陣式……！」

プログラム・スフィア
リフティング・ホイール
導輪駆動船の船体にも匹敵しそうな巨大な球状立体魔陣式が、ミラノたちの眼前に出現したのだ。

「まさか、彼方かなたの御馬鹿が無理に発進しようとしているんじゃないか……」
軍港内に詰めているはずの紗々崎ささざき彼方の性格を考えれば、この場面まへでこちらに無断で緊急出港を企てても可笑しくはない。

だが桜色の魔力光を有する彼方が導輪駆動船を霊体リフティング・ホイールから物体マテリアルへ還元させようとしているのなら、そこで展開される魔陣式の放つ魔力光も桜色でなければならず——だから、自分すら騙せないような言葉は、由宇の報告であっさりと否定された。

「こ、港湾内部から出港しようとしている船舶は見られません。それにあれは……霊体還元アストラルの魔陣式ではありません！ 召喚……召喚呪式です！ 正体不明の高密度の物体が、港湾直上に召喚されよう

としています！」

物体、と由宇は言った。

本来完全な^{アストラル}霊体——霊質のみで構成された世界であるシオの海
域内に物体が存在するのであれば、それは現実世界、つまりは物質
界から持ち込まれたものに他ならない。

海魔の巨体とて、^{アストラル}霊体が集合し密度を有しているものに過ぎず、
物的な意味での質量は有していないのだから。

海魔も所詮は、地表で形成された現実の地形を模した擬似立体と
同様の、密集して固体化したシオの塊に過ぎない。

ならば、そこに物体が呼び出されるのであれば、それは確実に人
が造りだした物であり、それは確実に人の意思が絡んでおり自然現
象的なものでは、あり得ない。

〈誰か〉が〈何か〉を呼んでいる。

では、〈誰〉が〈何〉を？

誰かなど、そんなこと。

「そんな、こと……」

そんなことは銀色に輝きを増していく球体を見ていれば一目で解
る事で、だからこそミラノは、解りたくないと言身を震わせた。

^{インペリアル・シルバー}
「皇帝色……」

由宇の眩きが、耳に届いた。

皇帝色。金と銀。

人が作り得ぬ、人が持ち得ぬ至高の輝き。

もしその色を有する人が居たのならば、最早その存在が人である
筈がなく、至高に至ったその存在を評するに相応しい言葉を他に用

意するべきだろう。

そう、人を、天上に等しき位置から支配する、〈皇帝〉の御名を。

プログラム・スフィア
球状立体魔陣式が、輝きを増す。密度を増す。シオの海域を遍く照らし彩るように。

「来るの……？」

…。
。

ミラノの震える唇は、遂に音を成す事はなかった。
だが、遂に。



十一話（後書き）

前回長かったので今回短いです。

まあ、連載用にテキスト量の制御を行っていないせいなのですが。

しかし、説明を挟むタイミングってのが掴めんなあ。

後々椅子に座って口頭説明会ってのを避けたいから、ボチボチ地の文で入れ込んだりもしてるんですけど、そのせいでペースが遅くもなってるし。

この辺は練習あるのみだなー。

十二話



全身に圧し掛かっていた圧力が、突如として消え失せる。
束縛からの開放感。浮遊の感覚、次いで。

「——っ、わぁっ？」

下へ向かっての、落下。何か硬くて平らな場所へと、郁斗は腹から身を投げ出した。

肺が詰まる——呼吸が出来るようになっていたことに、気づく。
顎を打ってしまい、眩暈がする視界の中で、郁斗は我が身に起こった現象を確かめるべく身を起こした。

「痛つつ……何が……、っ！」

起き上がろうとして、二度目の衝撃。

今度は背中の上に、軽くて、しかし重たいものが。

「なんだっての……さなちゃん！」

背に掛かった重みを押しのけようと強引に体勢を入れ替えてみれば、そこに居たのは紗那沙に違いなかった。

郁斗と同様にずぶ濡れで、気を失っているらしい紗那沙の白い顔。

「さな……さなちゃん！　しっかり、おい！」

容赦なく頬をたたく。体を強くゆすり、ついでに背中もぶっ叩いて。

「っ……えっ！」

果たしてその行為が正解だったかは悩みどころだが、果たして紗那沙は激しく咳き込みながら息を吹き返した。

濡れた髪を振り乱して、荒く、何度も何度も咳を繰り返して肺に

入っていた海水を吐き出す。

「うえっ……えっほ、い……つく、ん？」

「……無事っぽいね」

涙交じりの赤い目を向けてくる紗那沙に安堵して、郁斗は深々と安堵の息を漏らす。

「死ぬかにやって……なんなの、もお」

「いや、うん。……僕も聞きたいや。これ、いったい何なんだ……」
状況はさっぱり理解できず、ただお互いの存在だけが確かなものだった二人は、それを確信したくて抱き合ったまま身動きが取れなかった。

「うう……怪獣、目の前で見ちゃった……息は出来ないし、死ぬかと、ホント死ぬかって」

「うん、怖かった。本当に怖かった……」

しなだれかかる紗那沙の桃色の髪を撫で付けながら、郁斗はゆっくりと背もたれに身体を押し付ける。

——背もたれ？

「何……？」

「わにやつ？」

突然身を跳ね起こす郁斗に、紗那沙は悲鳴を上げる。

「ちよ、いっくんなにいきなり！」

「何じゃないよ！　いったいなんだ、これ！」

「何って……何が……えっと……何かにゃ？」

慌てふためく郁斗の態度に、紗那沙もようやく周囲に視線を向ける余裕を覚えて——そして、理解を喪失した。

半円級、馬蹄のような形で囲う、明らかに工学的な意味合いをもって作られている何かの設備に、二人は身を預けていたのだ。

「一体……」

「うわ見ていっくん、綺麗……」

「宝石？ 何カラットあるんだよ」

立ち上がって見ればその設備は二人の腰の位置くらいの高さがあり、馬蹄の設備の内側の空間に、人が一人立つのが丁度良いくらいの広さがあった。

設備の中央にはバレーボール大の巨大な水晶球が占めていて、その周囲を色鮮やかな宝石が天板の継ぎ目に走る光の線で結ばれて幾つも意味ありげな配置ではめ込まれている。

馬蹄の両端に位置する場所には、中央のそれと似た、大きさは手のひら大の水晶球がいかなる原理か浮遊しているコーンカップの上に乗っかっていた。

郁斗は馬蹄の形の内側に居る形だったから、その二つの水晶に手を置いてみるのが、ちょうど良い塩梅かもしれない。

「なん、だよ、コレは……」

「下の段にも、同じ感じのがあるけど……あっち、椅子がついてる？」

紗那沙の言葉に、郁斗も更に辺りを見渡す。

広さは精々大型トラックの荷台程度の面積の、視界の奥——先端に行くにしたがって窄まって、否、鋭く尖っている平らな空間。

郁斗たちはどうやら、奥まった、横幅が一番広い位置にある、演台のように他の場所より高くなった見晴らしの良い位置に居たらしい。

段の高さは二段階になっており、郁斗たちの一段下の台の部分には、紗那沙が気づいたとおり、馬蹄状——いや、円弧状の宝石をはめ込まれた設備が広がっていた。

円弧の内側を三等分する形で、椅子と思わしきものが並んでいる。

「……ここは、背もたれだけか」

「っというか、ただの安全柵なんじゃ……落ちそう」

背後を振り返ると、腰より少し高い位置までの高さがある柵が二

人を囲んでおり、そして、その先は切り立った崖のようになっていた。見下ろしてみると、郁斗たちの立つ上面の空間に対して内側に競りこむように壁面が存在している。

壁面の形を単純化してみると、恐らくは二等辺三角形を逆さにした感じだろうか。

した半分近くを占める巨大な穴からは、何か銀色の燐光が噴出していた。

「……三角錐を真つ二つに切って横に寝かした形、かな」

「なんていうか……多分、船？　　というか、これ、ひょっとして……ゆうふおお？」

「ゆう……」

UFO。

未確認飛行物体。

だが今紗那沙が言っているのは、ゴシップメディアの片隅に写真が乗るようなソレではなく、先ほど——中央塔最上階で窓越しに目撃していた。

「周りに輪っかも浮いてるし……マジでそうなのか」

遠目で、激流に視界を遮られて細部は解らなかったが、近くへよればきつと、このような形もしていようと思わせる——郁斗たちは、そんな乗り物の上に立っていた。

「見て、いっくん。水が避けてる……」

「……凄い、な」

紗那沙の発見に、郁斗も目を見張った。

船、或いは戦闘機のようなこの乗り物の周囲の空間だけ、切り取られたかのように水が避けている。

球状の空間の直径は、乗り物を囲うように水平に位置している巨大な輪と同一。

歯車のように凸凹でこぼことした複数のパーツで構成された巨大な輪の、

それぞれのパーツをつなぐ宝石の止め具から光のラインが結ばれていたから、それがすなわち、周囲の水を退ける秘密の正体なのだろう。

ゆっくりと回転しているらしい歯車は、どう考えても……うための——こういう状況に対応するための部品にしか見えない。

「このゆーふおー、水に浮いてるんだから、やっぱり船かな。こういう場所のため用の」

「浮いてるって言うか……沈んで……いや、うん。言いたいことは解るけど。この乗り物が船だとするとさ、じゃあ、この……」

二人の見下ろせる腰の高さに配置された馬蹄状に広がる機材は。

「操縦桿に、ボタンに、計器……」

「……肝心の運転手が居ないぞ。さなちゃん、人が居るって言うてなかったっけ？」

「言ったけど……あ、でも。これ色が違くにゃい？」

確かに紗那沙の言うとおりである。

郁斗たちが窓越しに目撃していた船(?)は、青と黒に、それぞれ光っていた。

そして、今郁斗たちが乗っかっているこの船の色は、全体的に白というか銀色に近い。

「それに、輪っかの数が一つしかないよ」

「……さっき見てたやつとは別のヤツってことか。無賃乗車とかで怒られなきゃ良いけど……」

〈怒るも何も、そもそも私はキミのものだぞ、オーナー〉

声がした。

「にゃっ?」

「誰だ……っ?」

「F・E・E・L型呪唱機関出力七十パーセントで安定稼動。魔導^{ホイ}輪位置正常。船体軸と併せて異常無し。霊体^{アストラル}／物体構成比率正常。航行機能、兵装^{コンバット・コード}呪式、搭乗者保護機能、動力送伝機構、内部循環機構、全て異常無し……フム。三千年も沈没船を演じてた割りに、我ながら随分健全じゃないか」

驚く二人を尻目に、涼やかな声は、一方的に何か呪文のような言葉をつむいでいく。

言葉に従って、足元から、少しの鳴動を感じるのはい——。

「……動いて、る？」

否、動き出そうとしているのか。

床を走るラインがより強く光を放ち始め、良く見れば、周囲を取り巻く巨大な歯車もゆっくりと回転を始めていたのだから。

「こ、今度はにやに……」

「僕が知るかっ……って言うか、おい！ 誰だよ！」

肩を震わせしがみつくと紗那沙を抱きしめながら、郁斗は何処かあたりに向かって叫ぶ。

混乱の一途を迎えている状況、恐れを吹き飛ばすように。

「十年以上も待たされた挙句、第一声がそれか。中々洒落の効いたご挨拶だね、オーナー」

再び声が聞こえた。

「オーナー……僕のことか？」

「キミ以外に、誰が居る」

「いっくん、あそこ……」

紗那沙が震える指で示すその先。

この乗り物——船の、舳先に位置する細まった場所に。

いつの間にか銀色の美しい存在が居た。

「……綺麗」

「ああ……」

紗那沙の言葉にうなずかないわけにはいかない、それはあまりにも幻想的で美しい存在だった。

人の裸身。

踵まで届く銀の髪。

身を包むのは、長い一枚の布帯のみで。

へどうしたオーナー。そんなに間拔けな顔をして

詠うような声とシニカルな笑いが、絶妙の色気をかもし出している。

「お前は」

へん？ 寝ぼけているのかね。まさかキミ、私のことを忘れてしまった訳でもあるまい。いや、十二年間も放置されていたんだ。忘れられていたとしても驚かないがね！

「忘れ、いや……」

忘れるはずがあるまい。

こんな目立つ——多分女を、一度見たなら忘れるはずが無い。布で隠れた部分に果たして二つの膨らみがあるのか。それとも布で隠れた部分に果たして在るべき物が在るのか。

十二歳のオトコノコの郁斗に、それが気にならないはずが無く——しかし、気にしている場合ではない。

何より、あんまり凝視し続けていると直ぐ傍にあるピンクなアノ娘の視線が怖いことになりそうだし。

だから郁斗は、考えうる最も正解に近そうな単語を、口にするしかなかった。

「……セブン、なのか。その声」

尋ねる郁斗に、男のものとも女のものともつかぬ微笑を浮かべて、そいつは頷いた。

そして、幻想的な足取りで床を一步踏み出し、そのまま、ふわり

と浮かび上がる。

「飛んだ……」

「ふわぁ」

まるで御伽噺の天女のような姿に目を奪われる二人の前に、ふわりと、音もなく着地する。

へそうとも、私がセブンだ。オーナー、キミが名付けてくれたのだろう？ 試製特装艦〈聖櫃級〉七番艦——そこから取って

——セブン。

適当で安直な名前だ。

忘れないようにと、生まれてから今日まで忘れ続けていたけど。

「セブン、なんだな」

生まれる前、死んだ後に海の底で出会った。

深い海の底で、マリンスノーの満ちる海底で出会った、その、巨大な、巨大な——。

「船……やっぱり、船だ」

見上げたその姿を、巨大な円盤に囲まれた、鋭く洗練されたその姿を、確かに覚えている。

船だ。セブンは、つまりこの乗り物は船なのだ。

大海を征くもの。波を超え、丘を目指す巨大な姿。

しかしこの船は、セブンと名付けた——海底で出会った、そして今また、こうして海の中で再会したこの船の役目は。

この、魔法使いのための大きな船の役割は。

海底で交わされた会話の、いまや郁斗はその端々まで思い出す。それに気づいたのだろうか、セブンは楽しげに頬を緩ませた。そして、船体を——我が身を示して、高らかに歌う。

へさあオーナー。そろそろ寝ぼけた眼も晴れた頃だろう？　ならば
船出の時だ。荒れ狂うシオの激流を乗り越えて、共に最は」
「びえつくしっ！」

空気が凍った。

〈……〉

「……」

「は、ははは……にやはっ」

ギロリと視線を二つ向けられれば、可愛く笑って誤魔化すことが
——できるはずがない。

「空気読めよ淫乱ピンク！」

「だ、だって濡れた服が肌に張り付いて寒いじゃん！　おまけにも
っと寒そうな格好の人が出てくるし！」

〈待ちたまえ、まさかそのもっと寒そうな人、と言うのは私のこと
ではあるまいね！〉

「寒そうって言うかこういうヤツは痴女とか露出狂とか言うんだよ
！　っーかまじめな話してるんだから少しは我慢しろよ！」

〈誰が露出狂か！　王宮の大広間に飾られたタペストリーのモデル
になるような由緒正しき聖霊の羽衣だぞ！〉

「あゝ！　自分はこの布一枚のヘンタイさんを視姦してたくせに、
人にはまじめにしろとか言っちゃうんだ、このむつつり！」

〈二人とも私の話を聞け！〉

——いろいろと、台無しだった。

危機的状況とか幻想的な空気とか、一度乱れてしまえば二度と引
き戻せそうもなく——しかし。

——！

「なんだっ？」

馬蹄状の設備にはめ込まれた巨大な水晶が、光を放ち、音を響かせる。

へ……む。どうやら話は一先ず置いておくしかなさそうだぞ、オーナ―

それこそ空気を読め、と言う空気を全身から放ちながらセブンが言う。

「置いて置くて……何が」

「何って、見たままだが？」

「見たまま？」

「いっくん……あの、下」

紗那沙が啞然とした声とともに、下を指を刺す。

「下？」

見下ろせば当然、立っている床の金属製と思わしき外板しか見えるはずも無いが——だが、それ以外にも、確かに。

「……忘れてた」

忘れもするだろう、突然こんな場所に居居れば。

内心で言い訳をする。

そもそも郁斗が、セブンの存在を必要とした理由は——、考えるまでも無く。

「キッシーきたあああああ！！」

化け物が下から、大口を上げて彼らに迫ってきたのだ。



十二話（後書き）

なんかまあ、漸く、的に。

そろそろ尻に火がついてきたんで毎日更新も終わりですが。

盆前だったのに、変なタイミングで忙しくなるなあ、ホント。

十三話



光の繭が砕け散り、そして。

「……ああ」

自然、息を漏らしてしまった。

歯車のような特長的な形状をした、大型の魔導輪を備えた銀と白で彩られた導輪駆動船^{リフティング・ホイール}、その姿を目撃して。

船首に向かって鋭く鋭角的に研ぎ澄まされたラインは紙で折った飛行機のような頼りなさを感じさせながら、同時に一つ用途に特化し極めた洗練された風格も滲ませている。

——速[・]そう[・]だ。

遠目に見るだけでも、その導輪駆動船^{リフティング・ホイール}にはそう感じさせるキレ[・]のようなものがあつた。

「やはり、魔導輪^{ホイール}の音紋から推測するだけでも、出力はブルーローズに勝ります。こんな……あんな、小型のクルーザーサイズの導輪^{ホイール}船に……！」

管制席の由宇は、ありえないと震える声で言う。

舵輪を握ったままのミラノもまた、震えそうな身体を誤魔化すことが出来なかった。

「ブルーローズに匹敵すると言うことは、明らかに旧時代の原型機……、なぜ、郁斗が……！」

「郁斗……郁斗君、なのですよね、アレは、あの魔力光は、やはり」「皇帝色の魔力光を放つ、しかもこの学園の近隣に存在する魔法使いなど、考えられるのは郁斗以外居ないではありませんか！」

由宇に答える言葉は、割れ鐘のような響きを伴っていた。

それは、自らも自らの言葉を否定したいと言う感情を強く滲ませるものだった。



「来る、来るよ何かっ！ 口あけてる！ 牙沢山ある！」

「言われなくても解るっての！ ……で、どうすりゃ！」

〈緊急発進！ オーナー、杖ワンドを握れ！〉

「ワン……これかよ！ 操縦桿ジョイスティックっぽいの！」

紗那沙が悲鳴を上げ、セブンが叫び、そして郁斗は、当て勘に従って動いた。

馬蹄の両端に備わった、コーン状の浮いたパーツに乗っかっている水晶に、しがみつくように握り締める。

郁斗が握った傍から水晶が銀色の光を放ち、一瞬それを取り巻くように環状の魔方陣が出現して――。

「動く……！」

濠うろと足元から唸り声が響き、海水を退けていた歯車ギアがすさまじい速度で回転を始める。

「う、後ろ、後ろなんか、凄い光ってるよ？」

郁斗にしがみついたままの紗那沙が、背後を振り返って叫ぶ。

見れば、銀色の燐光が先ほどまでとは打って変わって目を覆うような輝きを撒き散らしていた。

足元、船体内部で溜め込んでいた力を、今まさに解放とうとしている、郁斗にはそう感じられた——握り締めた水晶を通して、そんな風に伝わってきた。

そう、伝わってくるのだ。

ゼロコンマ以下の一瞬に満たぬ時間の間に、この導輪駆動船リフティング・ホイールがなるとるかが、郁斗の脳裏に刻み込まれてきたのだ。

「これは……」

「感じた通りさオーナー。キミの船だ。キミを望む場所へと運び、キミが望んだことを成す」

背後に寄り添うセブンが、穏やかに語る。

——語るに、合わせて。

「いっ………けええーっ！」

銀色の導輪リフティング・ホイール駆動船は、閃光と化した。

「うにゃああああああああっ？」

「う、おおおっ？ 速、速いぞっ？」

「へはははは、当然さ！ 私を何だと思っているね！ 私こそが帝国最新鋭、帝国最速の導輪船ホイールだよ！」

自らの意思に従って見せた導輪船ホイールの尋常とは思えない速度に驚く郁斗たちとは打って変わって、導輪船自身であるセブンは実に得意気だ。

実際威張るだけのことはあって、結海内でも丁度現実と同じく中央に位置していた学園中央塔の直ぐ傍に居たはずの郁斗たちは、迫りくる海魔をもとせず、城乃下市きのしたの終端、街を囲む山の直前にまで接近していた。緑に染まった木々の連なりがもう目の前だ。

このままの速度で——進めば、間違いなく。

「ぶつかるっ！」

「街！ 駅！ じゃない！ 山、やまああああっ！」

船は頑丈そうで、山はやまなりに斜面を形成していたから、この

まま突っ込んでも発射台よろしく斜め前方に飛び出すだけで済みそうな気配もあるが——この海の中から出ると一体どのような怪異が待ち受けているのかと考えれば、ちょっと試すことは恐ろしく思えた。

「止ま……っつ、おおお！」

舳先を真っ直ぐに山林に向けている導輪船^{ホイール}の進路を慌てて曲げようと、郁斗は握り締めた水晶球に必死で力をこめる。

止まれ、止まれと意思をこめて。

だがあまりにも速度を出しすぎた導輪船^{ホイール}は急には停止できず、ましてや荒れ狂う海流の中で簡単に進路を変更できるはずもなく、最早未知の世界への跳躍は時間の問題と言えた。

「止まれっての……止まれっ、止まらないなら、もお、……回れえええ！」

強引に、その場で。

引くも曲がるも出来ないならば、最早その場で船体を——果たして、彼の望みどおりに。

「うわにやつ？」

「なんとおっ？」

突然、すさまじい遠心力が甲板に立つ二人を襲う。

「何が——っ！」

起こったのか、顔を上げた郁斗は、その事実気づき目を見開いた。

轟々と、足元では相変わらずすさまじい音がしている。『全開加速^{トル}』、それを証明するかのよう。『フル・スロット』

だが、足元の唸り声とは対照的に、船はその一点で確かに静止している。

そしてなぜか、郁斗の視界の先にあったのは、結海の側面などではなく。

「回った……？」

そう、百八十度、くると向きを反転させたときか思えない情景。視線の先には、先ほど後にしたばかりの――背後にあって然るべき学園中央校舎と、その脇で間拔けに身をさらす、海魔の姿が見えるのだ。

〈リフト・ターンバック
導輪内反転回頭。横滑りせずにやってみせるとは、いきなりにしてはやるね、オーナー〉

流石は私の見込んだ男とでもいいかげな、セブンの楽し先ほどそうな声だった。

「輪っかの内側で船体だけを反転させて、推力を一気に逆方向に……」

〈そう。浮力を与える魔導輪と推進力を与える呪唱機関が、それぞれ独立して存在しているからこそ出来る、導輪駆動船の戦闘機動の一つだ。……ところで、良いのかい？〉

「何が？」

〈……先ほどから最大出力を出しっぱなしだが〉

「……あ」

一点で、唐突に推力を反転させました。

一瞬は慣性力と拮抗するでしょうが、さて。

「つとおおおおおっ？」

再びの最大出力。潮流を強引に突き破り、行き足は最大だ。

「ま、また、また……っ！」

〈この軌道を維持したままだと海魔にぶつかるね。……フム。艦首に紡錘状に防壁魔陣式を展開、と〉

「ちょ、今なにか、身体から力が抜けた感じがしたぞ？ お前、勝手に何を……って言うか、盾っ？」

最大加速を続けるセブンの船首に重なり合う角型の魔方陣が出現

し、折り紙細工のように変形しながら舳先を光の膜で包み込む。
鋭角状の舳先の前に、更に鋭角に尖る光の壁が出現した。

「ノーチラス級如きと激突したせいで船体に汚れがつくのも嫌だろう？」

「ぶつかること前提で準備するなよ！」

「言ってる場合じゃないよ！くん、前！ 本気でぶつかる！」

「ちよっ……ええっと、総員対ショック！ ……とか？」

「自分もぶつかる気だっ！」

冗談のような会話を真面目に飛ばしあう郁斗たちを前にして、海魔は見た目そのままの鈍重な図体を動かさきれなかった。

わずかに待ち構える形で長い首を郁斗達のほうへと向けていたが、しかしその緩慢な動作に意味はなく——むしろかえって、無理に急いた方向転換によって腹をさらす格好となってしまった。

「安心したまえ。私も一応は戦闘艦だ。装甲も捨てたものではないよ」

「その微妙な言い回しの、何処に安心する要素が……っ！ ——

ああもう、さなちゃん、つかまってるよ！」

「うええええっ？」

加速やら急反転やらで立っていられたかった紗那沙は、もう郁斗の腹に顔を押し付けて腰にしがみつくだけだ。

割とやばい姿勢であるが、生憎指摘してやれる誰かも居なかった。だから、そのまま。衝撃に耐えるために、顎を引いて、瞳を閉じて。

——激突。正面から最大速度での、激突。

思いのほか、衝撃が少なかったことは、いっそ意外だった。

一瞬足元が揺れるような感覚を確かに味わったが、しかし、それだけ。

両足は確りと床を踏みしめていたし、水晶球をつかんでいた両手

も、離れることはなかった。

まるで何事もなかったかのような、一種不思議な状況——が、しかし。

ごおおおお……ん。

「~~~~~っ!？」

「みぎゃっ!？」

衝撃は、ワンテンポ遅れてやってきた。

今度こそ真正正銘、船体を揺るがすすさまじい衝撃が郁斗たちを襲う。

「何が……なんだあ!？」

慌てて目を見開けば、目の前の光景は、最早何と評すればいいのやら。

船首が、化け物の寸胴の腹に突き刺さっていた——それは、良い。

真っ直ぐ突っ込んでいったのだから、それは突き刺さりもするだろう。

問題は、突き刺さったまま——全く勢いが止まらずに、船が全身を続けていること。

「と、止まらないぞおいしい!」

へははは、当然だろう。たかがノーチラス一匹でこの私を押し留められるはず無いじゃないか

「とかいっくん! 学校折っちゃったよ!？」

紗那沙の叫ぶとおり。

学園中央塔。高層百メートルに達する建造物が、化け物の巨体に押しつぶされて、ひしゃげて、崩れた。

視界の横を流れていく瓦礫の山は、その証左と言えよう。

しかし、化け物の巨体も、鉄筋コンクリート製の高層建築物も、船の行き足を遮ったりはしない。

船体後部から凄まじい勢いで銀色の粒子を吐き出し、周囲を取り巻くリングは超速の回転を示す。

加速。圧倒的な加速力によって、遮る全てを粉碎しながら、ただ進み、進むのだ。

「……フム。この距離なら外さないな」

「何事もなかったかのように進めるなよ！」

「いっくん、上！ 上！」

突込みを入れている横で、紗那沙が悲鳴を上げる。見上げて見れば、そこには確かに恐ろしい光景があった。

「上……首!？」

腹を貫いただけで貫通している訳でもなく、ただ背後の壊れた校舎に打ち付けているだけならば——これだけの巨体、みたままに強い生命力を有しているのだろう。

海魔が、長い首を鞭のようにしならせて、腹に突き刺さった小さなナイフを払い落とそうと頭を打ち据えてきた。

「防……！」

「防げる。この程度なら。私を甘く見ないで貰おう」

鎖の先についた鉄球のような勢いで、化け物の頭が郁斗たちに叩きつけられる。

しかし、周囲の海水を遮るように展開している球状の力場が、それを遮った。

球形をゴムボールのように撓めながらも、その弾力故か、郁斗たちには海魔の攻撃は届かない。

「にゃああっ！ 水降ってきたよ!？」

「魔法力さえあれば濡れたところで死ぬ訳でもないんだ。流石にそれくらいは我慢してくれたまえよ。砲陣展開。攻性魔陣式四号詠唱開始。入伝完了までカウント七」

紗那沙の言葉を軽くあしらったセブンは、自らの本体たる船に対して、何かの指示を下した。

すると、化け物の腹に突き刺さった鋭角的な船首を取り巻くよう

に、魔方陣が現れる。

円周に沿って八枚の長方形の板を並べたような魔方陣。船首の周りでゆっくりと回転を続けるそれは、徐々に輝く銀色の強さを増していき、やがて、内側へと向かって、折りたたまれていった。

円筒形の――さながら、砲身バレルのような形状へと。

船首に沿って、突き刺さる化け物の腹を目掛けて、砲口向けているかのようだった。

回転の速度が上がる。銀色の粒子が内側から溢れ出す。

〈入伝完了。発射準備由。オーナー。鍵語トリワードを唱えたまえ〉

「は？ トリ……や、いきなり言われても……」

当然のごとく話を振られて、郁斗は焦る。

セブンの顔を見て、目前――化け物と、船首の方に目を向け、視線を手元に落として。

この状況で何を望まれているかなんて、一つしかない答えだった。

「えっと……発射？」

攻性魔陣式四号
〈黎明のエスタリオス、開封コン・シイル〉

締りのない躊躇いがちの言葉に続く、冷静な音。

衝撃は、無かった。ただ眩さに、目を覆った。

その光景の意味するところはつまり、魔陣式に則り発動した魔法バレルが砲陣の内で圧縮し、加速を加えられ更なる威力へと増幅し、そして、解き放たれたということ。

何も状況が理解できぬ郁斗であっても、真実は解らずとも、『攻撃を行った』と言う現実だけは確り理解できていた。

それほどに、明確な、それは攻撃だったのだ。

――音。イン

斬撃。

砲を向け鍵^{トリガー}を引いた筈なのに、何故か『弾を撃った』のではなく『斬り付けた』と言うイメージが郁斗の脳裏を掠めた。

光の板が張り合わさった筒から放たれた銀色の閃光は、化け物の腹を今度こそ容赦なく貫き、そして――消えることなく、舳先から伸びる、一振りの刃と化す。

へ……どうかね、かつて暴虐の女神を切り裂いた、我が聖剣の威力は

「どうも、こうも……」

圧倒的過ぎて、言葉が見つからなかった。

船体の加速を続けたまま光の刃を解き放ったと言うことは、つまり神速の突きを化け物に見舞ったに他ならない。

それで、絶命したと言うことなのか。

化け物が海中に悲鳴を轟かせながら、塵へと姿を変えていく。

美しく、幻想的で、儚い光景。

いつか海底で見た、マリンスノーに違いない切片が散り行く様だった。

だが。

「……と、と、と止まらないぞおいしい!!」

「い、今吹っ飛ばしたの中等部の校舎だよね!? あ、体育館がっ!」

化け物の巨体と言う余計な錘も消えうせて、いよいよ船はその加速力を最大なものとした。

舳先から突き出した銀の聖剣をそのままに、障害になる全てを容易くふっ飛ばしながら、海流を掻き分け真っ直ぐに――真っ直ぐ先に。

「真っ直ぐいったら、また山に突っ込むよお!」

へ操縦系が敏感に反応し過ぎているな。少し感応レベルを落とさないとも動かんか……」

「何か今更言うなっばいことを冷静に語ってんじゃねーよ！」

へそうは言うがね、オーナー。私も三千年前に敵艦に特攻して撃沈したまま海底に放置されていたような船だよ？　むしろともに動くことが奇跡だと喜ぶべきだと思う」

「都合のいいときだけ自分をボロ船扱いするな！　ああもうっ、自分じゃ止まらないなら、強引に止まれる状況を作り出せば……っ！　勢い任せの発想。」

建物の一つ二つじゃ止まらないなら、もっと硬い物にぶつかってしまえば——即ち。

地面へと、舳先を向けた。

へぶつけて止める気か。無茶をするね、全く……」

「るっさいぞポンコツ！　地面擦れば、少しは……って、……え？」

ふと。

郁斗たちの航路を塞ぐように、黒い影——否、真実黒い船が。目の前に。

「ぶつかろうううっ!？」

「にゃああああっ!？」

十三話（後書き）

いやー、進まないねえ。

先の手順をちゃんと考えてるはずなのに、
どーも上手く段取れて
ないっつーか。

結構時間かかりそうだなあ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1717v/>

魔法使いと大きな船

2011年8月8日22時54分発行